

富田林市埋蔵文化財調査報告 7

中野遺跡発掘調査概要Ⅲ

1982.3

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市は大阪府の南東部に位置し、生駒・金剛山系の山麓丘陵地と羽曳野丘陵の一角を占め、河南平野南部の中心都市として発達しつつあります。また、大阪都心部と至近距離にあるため、大阪都市圏のベッドタウンとして近年著しい人口増加をみています。

中野遺跡は、石川の西岸に位置し、東に二上、葛城、金剛の山々を眺望できる景勝の地にあります。同遺跡におきましても、年々、宅地造成の計画が増加している傾向にあります。こうした状況のもとに発掘調査を実施してまいりました結果、弥生・古墳時代から中世に至る複合遺跡であることが字々にではありますが、解明されてきました。今回の調査におきましても、その一角を明らかにすることができました。本書が今後、遺跡の内容を知るうえでの一助となれば幸いと存じます。

最後に、調査および報告書作成にあたってご指導ご協力を賜わりました方々に厚くお礼申し上げます。

昭和57年3月

富田林市教育委員会

教育長 福田治平

例　　言

1. 本書は富田林市教育委員会が昭和56年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が実施した中野遺跡の緊急発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、富田林市教育委員会社会教育課中辻亘を担当者とし、昭和56年7月16日に着手し、昭和57年3月31日に終了した。
3. 本書の作成にあたっては、参加者全員があたり、本書の執筆は忍薰氏の協力を得て中辻が行なった。また、遺物の項は忍氏が担当した。
4. 本書の編集はおもに中辻が行なった。製図は遺構を白江和弘が遺物を忍氏が行なった。
5. 遺跡の地形図、遺構図および本文中の北は真北を示す。当該地域における真北は1972年8月現在、磁北に対し約7度3分東にふれる。
6. 調査区の平面図には遺構の番号(Locas Number)を示してあるが、これは調査ならびに整理の段階で用いた記号である。本文ならびに挿図、図版と対照する上で必要最少限にとどめた。本書作成にあたっては、性格の明らかな遺構ないし数個の遺構が一つのまとまりをもつものを溝1、掘立柱建物1などとした。
7. 調査の実施にあたっては、神戸商船大学教授(富田林市文化財調査会委員)北野耕平氏ならびに大阪府教育委員会文化財保護課技師玉井功・山本彰氏より格別のご助言をいただいた。また天理大学附属天理参考館学芸員竹谷俊夫氏のご協力を受け、(株)富士産業、(株)村本土木ならびに地主の方々のご援助を得た。ここに記して感謝の意を表します。

本文目次

はじめに

例　　言

I 調査に至る経過	1
II 位 置 と 環 境	2
III 層 序 及 び 遺 構	5
1 層 序	5
2 遺 構	6
IV 出 土 遺 物	15
1 弥 生 土 器	15
2 土 師 器	22
3 須 恵 器	26
4 輪	38
5 瓦	39
6 石 器	39
7 小 結	44
V ま と め	46

図版目次

- 図版1(上) 中野遺跡付近の航空写真 北東より
 (下) 調査区遠景 東より
- 2(上) 調査区北東部全景 南西より
 (下) 調査区南東部全景 西より
- 3(上) 落ち込み2 南西より
 (下) 落ち込み3 南西より
- 4(上) 溝2・3 南より
 (下) 土器群1 下地山面 北西より
- 5(上) 溝8・10 南より
 (下) 溝8断面 北より
- 6(上) 土器群1 北より
 (下) 土器群1 収出土状況 西より
- 7(上) 土器群2 北西より
 (下) 土器群2(部分) 北より
- 8(上) 4A区第4層遺物出土状況 南より
 (下) 落ち込み3 砥石・大型蛤刃石斧出土状況 東より
- 9(上) 4A区第4層埴輪出土状況 北より
 (下) 2C区溝10埴輪出土状況 南東より
- 10(上) 溝8・9 北壁断面 南より
 (下) 調査区西半部全景 北より
- 11(上) 掘立柱建物1・2・3・7 東より
 (下) 掘立柱建物1・2 北より
- 12(上) 掘立柱建物3・4・5・6 東より
 (下) 1B区全景 東より
- 13(上) 溝12須恵器出土状況 東より
 (下) 溝12遺物出土状況 北東より
- 14(上) 溝12遺物出土状況 南東より
 (下) 溝12土師器高杯出土状況 南西より
- 15(上) 土壌2 土師器出土状況 西より
 (下) 掘立柱建物7 L.N. 379須恵器杯出土状況 北西より
- 16(上) 掘立柱建物1 L.N. 397木片出土状況 南より
 (下) 掘立柱建物6 L.N. 279詰め石 北東より
- 17(上) 掘立柱建物1 L.N. 284断面 東より
 (下) 掘立柱建物1 L.N. 400断面 西より
- 18 苦生土器(壺・甕)
- 19 土師器(杯・高杯・甕・鍋)
- 20 須恵器(蓋杯・高杯・横瓶・短頸壺)
- 21 須恵器(甕・蓋甕・高杯蓋)
- 22 須恵器(車輪文・提瓶・平甕)
- 23 打製石器(石燃・石槍・石匙・石核)
- 24(上) 磨製石器(石庖丁・大型蛤刃石斧)
 (下) 旧石器(ナイフ型石器・根長剥片)・柱状片刃石斧
- 25(上) 円筒埴輪
 (下) 馬鹿

挿図目次

- 挿図1 周辺遺跡分布地図 3
 2 北壁断面図(東半部) 5
 3 溝8断面図 7
 4 溝12・13・14断面図 8
 5 土器群1平面図 10
 6 土器群2平面図 11
 7 掘立柱建物1平面図・断面図 12
 8 掘立柱建物2平面図 12
 9 掘立柱建物3・4・5・6平面図・断面図 13
 10 弦生土器 17
 11 苦生土器 19
 12 弱生土器 21
 13 土師器 25
 14 須恵器 29
 15 須恵器 31
 16 須恵器 35
 17 須恵器 37
 18 塚輪 38
 19 瓦 39
 20 ナイフ型石器・縦長剥片・石燃・石槍 40
 21 石槍・石鎌未製品・石核 41
 22 石庖丁・柱状片刃石斧・大型蛤刃石斧・碇石 43
 23 調査地点位置図 48

表目次

- 表1 土壌一覧表 9
 2 掘立柱建物ピット一覧表 14
 3 弦生土器出土地点一覧表 15
 4 土師器出土地点一覧表 23
 5 須恵器出土地点一覧表 26
 6 石器の法量表 44

I 調査に至る経過

中野遺跡は、富田林市中野町および若松町に所在する。石器等の採集によって1892年の『人類学雑誌』に「河内に於ける石器の新発見地」として紹介された市内では最も古い発見の遺跡である。このように早くから知られながらも、遺跡の実態については調査されることなく、1970年までの長い年月忘れられた存在であった。^(注1) 1970年の調査は小規模なものではあったが、弥生土器と各種石器を含むV字状遺構を検出し、弥生時代中期に属する遺跡であることが明らかとなった。このV字状遺構は引き続き1978年に大谷女子大学の中村浩講師の手によって延長部が調査された。狹少な面積ではあったが、豊富な遺物が出土し、遺物の内容を具体的に検討する機会を得た。1979年には、上記の地点から南西方200m離れた住宅建設予定地で、^(注2) 弥生土器、サヌカイト製石器等の遺物とともに、弥生住居址と推定される遺構を検出した。また、同地点から西方250mの河岸段丘東縁部においても宅地造成の計画があがり、調査した結果、弥生時代中期の溝を検出した。同講内からはサヌカイト製の石斧等が出土し、貴重な資料を得ることができたと同時に、瓦器や羽釜形土器等をともなった遺構を確認した。このようにして、従来推定していた遺跡の範囲も段丘東縁にまで広がることがわかり、同遺跡が長期間にわたる複合遺跡であることが明らかとなった。

今回、富田林市若松町5丁目668番地先において住宅建設の申請があがった。このため富田林市教育委員会が大阪府教育委員会の立会のもと、事前に試掘調査を実施した結果、遺物包含層および遺構を検出した。この調査結果にもとづいて、昭和56年7月16日から本格的な発掘調査を開始し、昭和57年3月31日をもって調査を終了した。

なお、本調査地は1979年3月から8月に実施した地点の南にあたり、国道170号線から東方50m、東高野街道から西方100mのところに位置する。

(注1) 北野耕平『富田林市史』第4巻考古編(1972年)

(注2) 中村浩著『中野遺跡発掘調査報告書』富田林市教育委員会(1979年)

調査参加者

白江和弘 高橋修美 端山直樹 辻本佳弘 今村雅彦 永長寛康 岡本武司 大石聰 岡松木村泰雄 村井正幸 橋本宏三 松永勤子(以上河南高校卒業生) 山口勝弘(阪南大学) 古東幸宏(龍谷大学) 加藤有二(大阪大学) 池田雅俊 打田雅彦(以上関西大学) 福田康代 井本隆子(以上ブル学院短期大学) 山田道司 住吉正行 岡嶋智美 福田恵子仲井和代(以上河南高校考古学クラブ員) 星田義治 村本義宣 木口晴夫 田中真由美 桶田美智代

II 位置と環境

富田林市は大阪府の東南部に位置している。市域の東と西は金剛・生駒山系の山麓丘陵地と羽曳野丘陵の一角を占め、ほぼ中央をこうした丘陵地帯の間を貫うようにして石川が北流している。市内の多くの遺跡は、この石川に面した河岸段丘上に分布している。

中野遺跡は、標高約56mの石川西岸にあって、富田林市中野町1丁目・2丁目、若松町4丁目・5丁目、中野町西1丁目、若松町西2丁目・3丁目に位置する。中央をほぼ南北に走る国道170号線によって東西に2分された形になっている。その範囲は南北約500m、東西約700mと推定され、東端は河岸段丘の東縁にまで遺物・遺構が認められる。遺跡周辺の地形は、石川に向って西から東にゆるやかに傾斜し、なおかつ南から北に低くなっている。

中野遺跡をはじめとして、石川の西岸一帯には繩文・弥生から歴史時代にいたる集落遺跡がみられる。同遺跡から4km南には、市内で最初に発見された繩文時代前期の錦織遺跡がある。^(注1) さらに石川を1km遡った標高約73mの地点に錦織南遺跡がある。同遺跡は、1981年の5月から7月にかけて大阪府教育委員会が実施した発掘調査の結果、繩文時代晚期の大洞系土器を数多く伴った河道が検出され、繩文時代に属することが位置づけられた。^(注2) 同遺跡から北へとつづく標高約67mの段丘上には、弥生時代中期の住居址群が検出された甲田南遺跡がある。^(注3) 同遺跡の発見は数年前のこと、市内では喜志・中野遺跡とならぶ弥生時代の遺跡として注目される。^(注4) 喜志遺跡は、市内最北端に位置し、弥生時代中期の集落遺跡として、また、サヌカイト製の打製石器を非常に豊富に出土することでその名が知られている。標高約51mの台地上にあって、西方3kmにはサヌカイトの原石を産出する二上山がそびえ、石器製造の工房址としての性格を思わせる。このことは、南方1.7kmの中野遺跡においても同じである。中期以降になると、石川を西方に見おろす市内南部の高地に彼方・滝谷遺跡がある。これらの遺跡には、弥生時代後期の高地性集落としての特徴が認められる。

古墳時代になると、石川両岸の平地を一望する位置に多くの古墳が営まれる。中野遺跡の西方を南北に延びる羽曳野丘陵上には甘山古墳・真名井古墳をはじめとする前期の前方後円墳が位置する。これらの古墳はいづれも4世紀末の築造と考えられる。中野遺跡に最も近い真名井古墳は、全長60m、後円部の直径40m、前方部の幅20m、後円部の高さ5m、前方部の高さ1mをはかる。市内では数少ない中期古墳として、錦織神社南古墳がある。同古墳は石川西岸の中位段丘上にあって、平地部に築かれた同時期の特徴を示している。後期になると、群集墳とよばれる多数の墳墓がみられる。市内南部の嶽山西斜面には、23基の円墳からなる嶽山古墳群がある。^(注5) 同古墳群の北方800mの石川を西方に見おろす丘陵上には田中古墳群があつて、眼下の



挿図1 周辺遺跡分布地図

平地には西野々古墳群が点在している。

一方、中野遺跡の西方 800m の羽曳野丘陵東端には、終末期古墳として著名なお龜石古墳^(注8)がある。直径15m、高さ 3m をはかる円墳で、横口式の家形石棺を有し、横穴式石室から石棺式石室への組形となる過渡期の特徴が認められる。また、家形石棺の周囲には飛鳥時代の平瓦が壁状に積み上げられている。同質の瓦が、同古墳から東南方 280m の平坦地に位置する新堂廃寺にみられることから、被葬者がいかに同廃寺と深い関係があったかがうかがえる。

歴史時代としては、新堂廃寺をはじめとして細井廃寺や錦織廃寺といった飛鳥時代から平安時代にかけての寺院址があげられる。なかでも、府下でも数少ない飛鳥時代の寺院址である新堂廃寺の存在は、当時の仏教文化の伝来を裏付けるものとして重要であるとともに、中野遺跡周辺の石川谷が文化の先進地帯であったことを示す点で貴重である。^(注9)^(注10)

(注1) 北野耕平「錦織縄文遺跡について」(『古代学研究』第5号、1951年)

北野耕平「考古学より見た富田林」(『富田林市誌』、1955年)

(注2) 山本彰『錦織南遺跡』大阪府教育委員会(1981年)

(注3) 今村道雄「甲田南遺跡と出土遺物」(『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会第5回資料』、1981年)

(注4) 梅原未治・島田貞彦「河内国南高安及び喜志石沼時代遺跡調査」(『京都大学考古学研究報告』第2冊、1917年)

渡辺昌宏・芝野圭之助「喜志遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会(1978年)

尾上実「喜志・東阪田遺跡発掘調査概要Ⅲ」大阪府教育委員会(1980年)

尾上実・今村道雄「喜志・東阪田遺跡発掘調査概要Ⅳ」大阪府教育委員会(1981年)

(注5) 梅原未治「近時調査せる河内の古墳」(『考古学雑誌』第5卷第3号、1913年)

(注6) 藤原幹・井上薰・北野耕平「河内における古墳の調査」(『大阪大学文学部国史研究室報告』第1冊、1964年)

(注7) 富田林市教育委員会「富田林市の埋蔵文化財—埋蔵文化財分布図一」(1978年)

(注8) 猪飼兼勝「飛鳥時代墓室の系譜」(『研究論集目次』奈良国立文化財研究所学報第28冊、1976年)

奈良国立文化財研究所『飛鳥時代の古墳』飛鳥資料館図録第6冊(1979年)

(注9) 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」(1936年)

大阪大学国史研究室『河内新堂廃寺』(『第1期調査報告』、1960年)

大阪府教育委員会「河内新堂・烏合寺跡の調査」(1961年)

(注10) 北野耕平「富田林市史」第4巻史料I考古編(1972年)

III 層序及び遺構

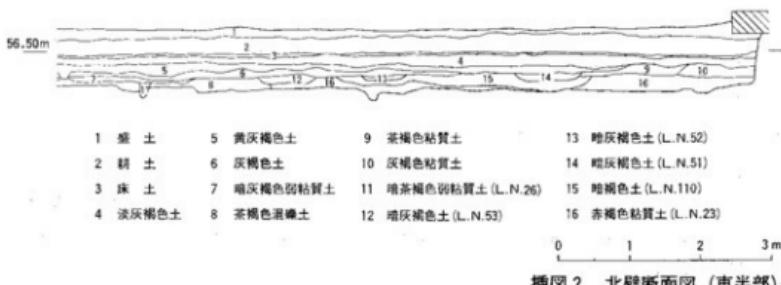
調査区は、北側東西辺約45m、南側東西辺約30m、南北辺約30mの台形状の水田である。調査にあたり、真北軸を基準線として東西40m、南北30mの調査区を設定した。さらに調査区を10m単位の小区画に分割し、西から東へ1～4区、北から南へA～C区とした。

調査において、層序および遺構番号はレイヤーナンバーとローカスナンバーの頭文字を数字の前に冠して、それぞれL.N.の記号を用いた。層序は表土から下へ1ケタの数字で、L.N.1, L.N.2…とし、遺構はその種別に係わりなく、11以上の数字でL.N.11, L.N.12…として示した。

本書では層序を示すL.N.1, L.N.2…をそれぞれ第1層、第2層…とする。

1. 層序

基本的な層序は地表下10～20cmが表土（第1層）で、耕土（第2層）および床土（第3層）の厚さは20～30cmである。床土下には5～15cmの淡灰褐色土（第4層）があり、東に厚く西に薄い。さらに黄灰褐色土（第5層）、灰褐色土（第6層）が堆積する。黄灰褐色土（第5層）の厚さは4～15cmで、西半部では極めて薄く、東端部では認められない。灰褐色土（第6層）も黄灰褐色土（第5層）同様西に薄く、西端部では認められないものの、北東部では10～20cmの厚さで、茶褐色粘質土および灰褐色粘質土として認められる。なお、この茶褐色粘質土は部分的なものである。さらに中央部を中心に幅約23mの間で暗灰褐色弱粘質土（第7層）が堆積する。この暗灰褐色弱粘質土（第7層）と同じ高さで、北東部の灰褐色粘質土下には暗褐灰色粘質土の堆積が部分的に認められる。北東部では地山が一部低くなっている。地山直上には赤褐色粘質土が認められ、東半部地山直上には茶褐色混礫土（第8層）が薄く堆積する。



挿図2 北壁断面図(東半部)

2. 遺構

検出した遺構には溝16、土壙3の他、多数のピットがある。ピットのうち建物として復元できるものが8棟ある。また、これらの遺構の他に土器が密集して出土したものを土器群1・2、落ち込み状の遺構を落ち込み1~5としてとり上げた。以下、各遺構について説明を加える。

溝1 (L.N.51)

4A区に位置し、長さ7m分を検出した。幅約50~90cm、深さ約10cmで、北35度東に流れる。断面は浅い皿状をしている。埋土は黒灰褐色土で、弥生土器、土師器、須恵器を含む。

溝2 (L.N.53)

4A・B区から3B区にのびる溝である。長さ22m分を検出した。幅約40~80cm、深さ約10~25cmあり、北15度東に流れる。断面は皿状をしている。埋土は暗灰褐色粘質土で、弥生土器、須恵器、サスカイト片の他に石槍が出土している。

溝3 (L.N.72)

3B区から3C区にまたがる溝で、長さ14m分を検出した。溝の主軸は北9度東を向く。幅約40~80cm、深さ約15~20cmで、断面はすり鉢状をしている。埋土は上下2層に分かれ、それぞれ暗茶褐色混砂礫土と暗灰茶褐色粘質土である。溝2と重複しており、切り合いから溝3の方が新しい。遺物には、サスカイト片、弥生土器、須恵器の他、瓦がある。

溝4 (L.N.52)

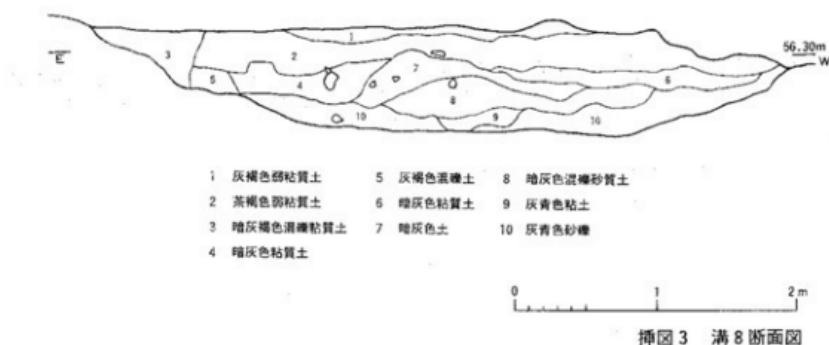
4A区に位置する溝で、長さ8m分を検出した。溝の主軸は北44度東を向いており、北壁手前で北方向に蛇行しながら溝2と交差している。幅約40~70cm、深さ約10cmで、断面は浅い皿状をしている。切り合いかれから溝4の方が新しいことがわかる。埋土は暗灰褐色土で、サスカイト片、弥生土器、土師器、須恵器を含む。

溝5 (L.N.80)

4A区南に位置し、長さ2.2m分を検出した。溝の主軸は東18度南を向く。幅約100cm、深さ約5~25cmで、東半部では西半部に比べ約20cmの高低差が認められる。溝2によって切られている。埋土は暗褐灰色粘質土で、遺物は含まない。

溝6 (L.N.165)

4B区北に位置し、長さ3.2m分を検出した。幅約80~100cmで、深さは約10cmある。北78度東に主軸があり、溝内には3個所のピット状落ち込みがみられる。溝2によって切られている。埋土は黄灰色弱粘質土で、遺物は含まない。



溝7 (L.N.31)

3 A・B区にわたる溝である。長さ約18m分を検出した。溝の主軸は北16度東を向いており、溝2とほぼ平行に走る。幅約30~50cm、深さ約5~10cmである。断面はU字形をしている。埋土は明茶褐色鶴粘質土で、土師器、須恵器を含む。

溝8 (L.N.81)

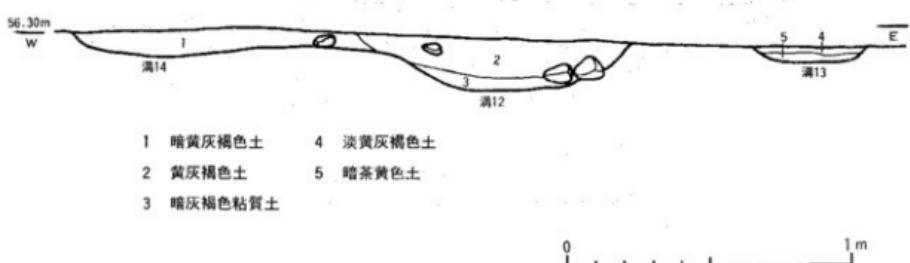
調査区のほぼ中央を北に流れる溝である。延長約30mを検出した。段丘疊層を大きく掘り込んでおり、幅約450~600cm、深さ約80cmを測る。溝の南半部では両肩の中段にテラス状のゆるやかな傾斜部分がみられる。溝内の堆積は大きく3層に分けられる。I層は厚さ約20~30cmの鶴粘質土の堆積である。II層は約10~30cmの厚さの粘質土層で、I・II層とも意識的な埋土と考えられる。III層は部分的に薄い粘土層をはきむ砂礫層で、流水による自然堆積であることがわかる。遺物には、サスカイト片、弥生土器、土師器、須恵器の他に円筒埴輪および瓦がある。遺物は最下層の砂礫層からの出土が最も多く、特に須恵器の占める割合が大きい。

溝9 (L.N.73)

3 A区に位置し、北16度東に流れる溝で、溝8の支流と考えられる。長さ約6m分を検出した。幅約200cm、深さ約25~40cmを測る。埋土は3層に分かれる。上から順に、暗茶褐色粘質土(15~20cm)、暗灰褐色粘質土(10~20cm)、灰褐色砂礫(10cm)が堆積する。遺物には、サスカイト片、弥生土器、土師器、須恵器がある。

溝10 (L.N.67)

やや蛇行しながら北10度西に流れる溝である。溝9同様溝8の支流と考えられる。幅約170~300cm、深さ約15~40cmを測る。埋土は溝9と同じく、暗茶褐色粘質土(10cm)、暗灰褐色粘質土(10cm)、灰褐色砂礫(15cm)の3層が堆積する。溝内には落ち込みが数箇所みられる。遺物にはサスカイト片、弥生土器、土師器、須恵器の他に円筒埴輪および馬齒がある。



插図4 溝12・13・14断面図

溝11 (L.N.58)

2 C区南端に位置する溝で、長さ約6m分を検出した。溝の主軸は北17度西を向く。幅約30~100cmで、深さ7cm前後と非常に浅い。埋土は暗茶褐色弱粘質土で、土師器、須恵器を含む。

溝12 (L.N.251)

調査区西半部、1 A区から2 A・B区にまたがる溝で、長さ約20m分を検出した。北5度西方向に大きく蛇行する。幅約70~100cm、深さ約10~20cmを測る。埋土は上下2層に分かれ、上から順に黄灰褐色土(5~15cm)、暗灰褐色粘質土(5~10cm)が堆積する。遺物には、サヌカイト片、土師器、須恵器があり、焼土塊と炭化物が混じる。遺物はおもに下層から出土している。

溝13 (L.N.263)

1 A区と2 A区のほぼ境にあり、北16度西に主軸をもつ溝である。北側延長部は試掘溝によって切られている。長さ3m分を検出した。幅約50cm、深さ約10cmで、断面は浅い皿状をしている。溝12と切り合い関係がみられ、溝12によって切られている。埋土は上から淡黄灰褐色土、暗茶黄色土の順に堆積する。遺物には、サヌカイト片、土師器、須恵器の他に瓦がある。

溝14 (L.N.253)

1 A区の南に位置し、東西方向から南北方向にL字形に曲がる。幅約30~150cmで、東に行くにしたがって広がる。深さは約10~20cmあり、コーナー部分で10cm前後の高低差が認められる。断面で観察すると、溝12によって切られていることがわかる。埋土は暗褐灰黄色弱粘質土で、土師器、須恵器を含む。

溝15 (L.N.264)・16 (L.N.265)

ともに1 A区北西隅で検出した東西方方向の溝である。溝15は西壁から3.5m、溝16は西壁から2mで消滅している。幅は30cm前後、深さは3~5cmと非常に浅く、断面は皿状をしている。埋土は淡灰黄色土で、遺物は含まない。

落ち込み 1 (L.N.50)

4 A 区東壁沿いに位置する。東側は壁にかかり、全体の形状は不明である。南北径約 9m、東西径約 3m 分を検出した。深さ約 15~20cm で、底部には凹凸が認められる。埋土は暗褐色粘質土で、サヌカイト片、弥生土器、土師器、須恵器を含む。出土した遺物は南側では少なく北側に集中してみられる。

落ち込み 2 (L.N.110)

4 A 区北に位置する。北側は調査区外にあたるため全体の形状はつかめない。北壁から南に幅約 3m、長さ 4m 分を検出した。北壁断面部の深さは約 15~20cm で、断面は皿状をしている。南東部分は L.N.50 と重複しており、L.N.50 と共に L.N.23 を掘り込んでいる。埋土は暗褐色土で、弥生土器、土師器、須恵器、サヌカイト片の他に石鐵が出土している。

落ち込み 3 (L.N.23)

4 A 区北東隅から北壁に沿って約 7m、北 32 度東に向く東壁に沿って約 12m の三角に突き出た範囲に認められる。深さ約 15cm と浅く、底部地山面には凹凸部分がみられ、赤褐色粘質土が堆積する。溝 2 と溝 4 の交差する地点では、舌状に約 3m 突き出た形になっている。出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、サヌカイト片の他に太型蛤刀石斧、砥石、平瓦がある。

落ち込み 4 (L.N.319)

調査区南西部、1 B 区と 1 C 区にまたがっている。西壁から幅約 4m、長さ約 7m の舌状に突き出た形をしている。深さは約 10~30cm ある。埋土は 2 層に分かれ、上から順に 5~10cm の円礫を含む灰黄色粘質土（5~15cm）と暗灰色粘質土混じりの黄灰褐色粘質土（15cm 前後）が堆積する。遺物には、サヌカイト片、弥生土器、土師器、須恵器の他に瓦器がある。

落ち込み 5 (L.N.273)

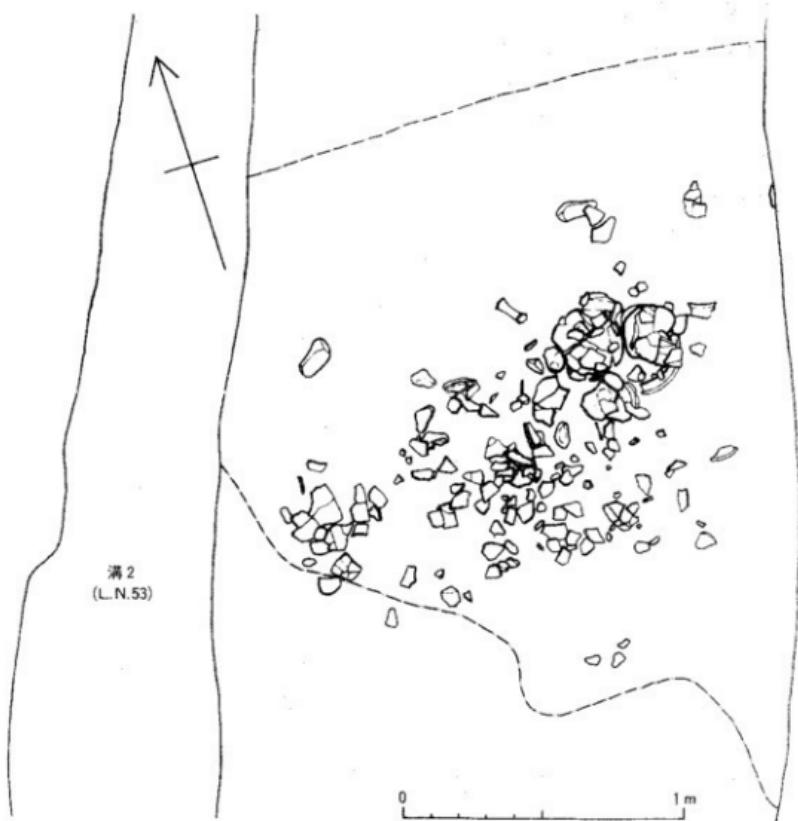
1 A 区に位置する。長径 3m、短径 1m の南北に長い不定形な落ち込みである。深さは 10cm 前後と浅い。埋土は黄灰褐色粘質土で、サヌカイト片、土師器、須恵器を含む。

土壤 1・2・3

検出した土壤はいずれも調査区西半部に位置する。規模、埋土、出土遺物等については、以下の表 1 で表す。

No.	規 模 (cm)			埋 土	遺 物	形 状	備 考
	長 径	短 径	深 さ				
(L.N.260)	120	90	8	暗褐色粘質土	土師器、須恵器	橢円形	1 B 区
(L.N.299)	250	130	10	灰褐色土	土師器	不定形	1 C 区
(L.N.275)	160	80	40	暗茶褐色粘質土	土師器、サヌカイト片	橢円形	2 B 区

表 1 土壤一覧表



挿図5 土器群1平面図

土器群1 (L.N.11)

4B区東壁沿いに検出した土器群である。東壁から幅2m、南北1.5mの範囲に広がる。地山上の黄褐色粘質土が混じる暗灰褐色粘質土中に弥生土器が密集して認められた。土器の器種には壺、鉢、甕がある。土器に混じって若干のサヌカイト剝片が出土している。

土器群2 (L.N.12)

4A区L.N.50上面にみられ、東壁から幅1.5m、南北2.5mの範囲に広がる。疊混じりの暗褐灰色粘質土中に若干の須恵器を含んで、弥生土器が密集して認められた。弥生土器の器種には壺、高杯、鉢、甕がある。土器に混じってサヌカイト剝片と大型蛤刃石斧が出土している。

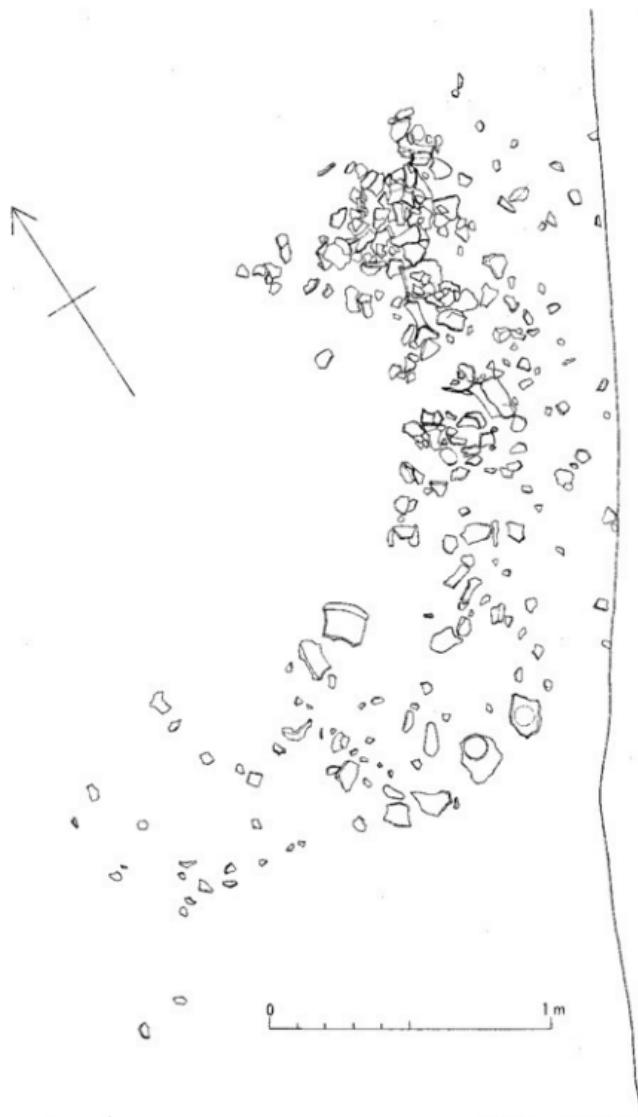
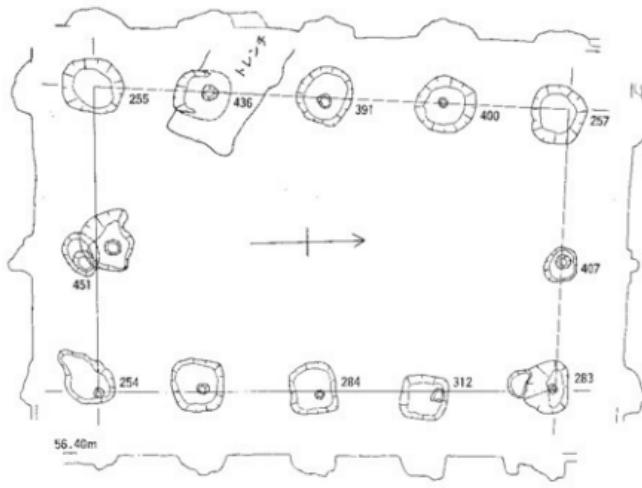


插圖 6 土器群 2 平面圖



挿図7 挖立柱建物1平面図・断面図

0 1 2 m

掘立柱建物1

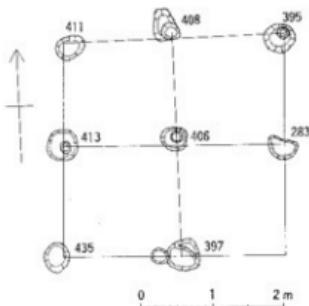
調査区西半部の1B区に位置する。2間×4間の南北に長い建物である。梁行650cm、桁行420cmを側る。建物方位は北2度東に振れる。柱穴の形状は方形が多く、深さは16~34cm、径は小さいもので62×53cm、大きいもので85×80cmと規模は一定していない。埋土は灰褐色粘質土で、土師器、須恵器、木片、炭片、サスカイト片を含む。L.N.256からは石鏡が出土している。

掘立柱建物2

1B区掘立柱建物の北に重なるように位置する。2間×2間の純柱建物である。柱間寸法は東西・南北方向ともに平均150cmである。建物方位は北3度東に振れる。柱穴の平面形はほぼ円形をしており、径40cm前後である。埋土は暗灰褐色粘質土で、土師器、須恵器の他に木片、炭片を含む。掘立柱建物1と重複関係が認められ、掘立柱建物2の方が新しい。

掘立柱建物3

1B区西端、掘立柱建物1の西に位置する。南北2間×東西1間以上の建物である。L.N.401、L.N.



挿図8 挖立柱建物2平面図

403、L.N.405は建物の東辺にあたり、北3度東に向く。柱穴は径52~74cm、深さ13~18mのほぼ円形に近い平面をもつ。柱間寸法は約180cmある。埋土は黄灰褐色粘質土で、遺物は含まない。

掘立柱建物4

掘立柱建物3の北に位置し、掘立柱建物3と同じく南北2間×東西1間以上の建物である。東辺の柱間寸法は約190cmあり、北12度東に向く。柱穴は径55~80cmの方形で、深さ20~28cmある。埋土は淡黄灰褐色粘質土上で土師器、須恵器を含む。

掘立柱建物5

掘立柱建物4の北に位置する。方形、横円形の柱穴で、南北2間以上×東西1間以上の建物である。L.N.428は建物の北東隅にあたると考えられ、柱穴は北12度東に並ぶ。径32~45cm、深さ8~15cmで、埋土は灰褐色および暗灰褐色粘質土である。須恵器を含む。

掘立柱建物6

1A区西端、掘立柱建物5の北に位置する建物である。方形の平面をもつL.N.280は建物の南東隅にあたると考えられる。柱間寸法は150cmあり、L.N.280とL.N.279を結ぶ一辺は北34度西に向く。L.N.279は深さ24cm、径80×68cmと一番規模が大きい。柱穴内には淡黄灰褐色粘質土に混じって多くの礫が埋まり、弥生土器、土師器が出土している。

掘立柱建物7・8

1B区中央に梁行570cm、桁行360cmの建物が復元できる。南北2間×東西3間の建物と考えられる。建物西辺は北6度西に向く。(掘立柱建物7)もう1棟、1C区に梁行660cm、桁行340cmとする2間×3間の建物が復元できる。建物の南東部は削平をうけたが、かろうじて南東隅L.N.350が形跡をとどめたと考えられる。建物の一辺は西19度南に向く。(掘立柱建物8)

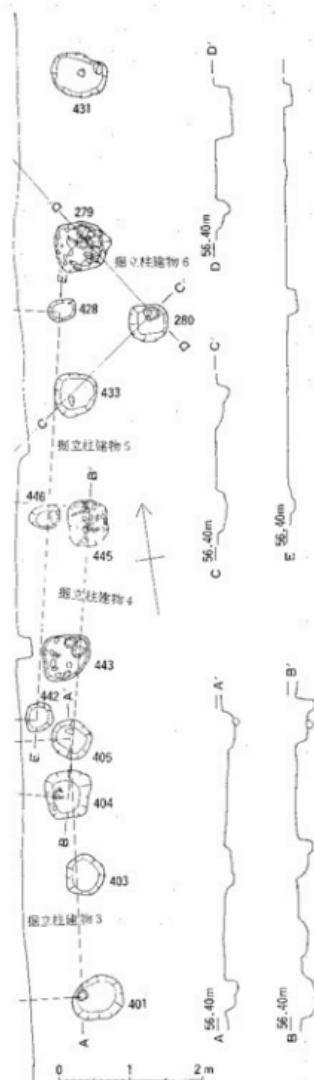


図9 掘立柱建物3・4・5・6

平面図・断面図

建物	遺構番号	平面形	規 模	深 さ	遺 物	備 考
1	255	不整形	85×76	30	土師器・須恵器・木片・炭片	
	451	橢円形	62×53	32		
	254	不整形	98×63	18	土師器	L.N.319より古い
	256	正方形	73×73	28	土師器・須恵器・サスカイト・石錐	
	284	正方形	72×64	30	土師器・須恵器	
	312	正方形	67×62	34	土師器・須恵器・サスカイト	
	283	不整形	73×67	28	土師器・須恵器・炭片	建物2に切られている
	407	不整形	48×45	16	炭片	
	257	不整形	80×77	20	土師器	西側一部削平
	400	円 形	85×80	27	土師器・須恵器・炭片	
	391	円 形	84×80	30	土師器・須恵器・炭片	
	436	不 明	不 明	26	土師器	試掘時に削平
2	435	円 形	43×36	21	土師器	
	413	正方形	47×43	16	土師器	
	411	橢円形	42×30	10		
	408	不整形	45×35	11	土師器・須恵器	
	395	円 形	44×40	19		
3	283	半円形	43×27	25	土師器	建物1と重複
	406	円 形	37×34	9		
	397	正方形	45×43	18	土師器・木片・炭片	
4	401	楕円形	74×62	18		
	403	不整形	58×52	13		
	405	円 形	57×53	16		
5	404	正方形	66×60	20		試掘時に一部削平
	443	扇 形	80×64	20		
	445	正方形	65×55	28	土師器・須恵器	
6	442	正方形	40×40	8		
	446	橢円形	45×33	15		
	428	長方形	38×32	12	須恵器	
7	433	不整形	62×60	14		円礫を詰める
	280	正方形	54×52	17		
	279	不整形	80×68	24	弥生土器・土師器	円礫を詰める
8	410	円 形	38×36	6		
	399	不整形	48×31	17	土師器	
	385	不整形	28×25	6	土師器	
	371	正方形	48×44	18		
	379	不整形	58×30	10	須恵器	
	414	円 形	26×26	6		
	298	円 形	56×55	34		
	291	円 形	25×24	5		
	288	不整形	57×48	4		
	314	長方形	70×40	15		
	350	正方形	18×17	3		
	336	長方形	75×46	14		
	315	不整形	54×48	17		
	303	円 形	53×47	32	土師器	

表2 挖立柱建物ピット一覧表

(単位: cm)

IV 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物のうち、土器類には弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器などがある。石製品としてはナイフ形石器、石鎌、石槍、石匙、石庵丁、大型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、砥石、敲き石などがある。この他、埴輪、瓦、馬齒がある。

1. 弥 生 土 器

弥生土器の大半は4A・B区で出土している。

出土地点	遺構番号	出土地点	遺構番号	出土地点	遺構番号	出土地点	遺構番号
土器群1	L.N.11	落ち込み3	L.N.23	溝4	L.N.52	建物5	L.N.279
土器群2	L.N.12	溝1	L.N.51	溝8	L.N.81	3A区ピット	L.N.32
落ち込み1	L.N.50	溝2	L.N.53	溝9	L.N.73	4A区ピット	L.N.261
落ち込み2	L.N.110	溝3	L.N.72	溝10	L.N.67	4B区ピット	L.N.136, L.N.146

表3 弥生土器出土地点一覧表

弥生土器を出土した地点は表2に示したとおりであるが、その中でも土器群1、土器群2、落ち込み1、落ち込み2で出土したものがその大半をしめる。その他、堆積層からも少量であるが出土している。いずれも弥生時代中期のものである。器種としては、壺、高杯、鉢、台付鉢、甕などがある。これらの中には生駒西麓産の胎土のものがかなり含まれている。

今回出土した弥生土器の大半は磨滅したり、剥離したりしてて調整の不明になったものが多い。そこで、調整不明のものは観察の中に特に記述しなかった。以下、口頭部の形態と口径によって分類を行う。

壺A 大きく外反して聞く口縁部をもつもの。

壺B 壺Aの小型品というべきもの。

壺C 短い頸部がわずかに直立したのち、大きく聞く口縁部をもつもの。

壺D はっきりした頸部をつくらず、そのまま外反する口頭部をもつもの。

壺E 外反したのち曲折して立ちあがる口縁部をもつもの。

高杯A 梶形の器体に脚部をもつもの。

高杯B 水平にひろげた口縁部をもち、内端に1条の凸帯をめぐらす。

鉢A 直口のもの。

鉢B 外反する口縁部もしくは段状の口縁部をもつもの。

- 甕A** 口径が20cm以下の小型のもの。
甕B 口径が20~25cmの中型のもの。
甕C 口径が25cm以上の大型のもの。

土器群2 (L.N.12) (挿図10 1~15)

壺A、壺C、壺E、高杯B、鉢B、甕B、甕Cが出土している。

壺A(1~4) (2)を除いて他は口縁部のみ残存。(2)はほぼ球形の体部に長大な頸部をもつ。口縁端部はほとんど拡張しない。口縁部内外面は横なで、頸部~体部にかけて内面は縱方向の刷毛目、体部下半外面は横方向のへら磨きを施す。頸部~体部にかけて外表面は1単位11本の櫛描き直線文を8条めぐらす。(1)の口縁端部は下方へわずかに拡張する。外表面は横なで調整。口縁部下端は刻み目で飾る。(3)(4)の口縁端部はわずかであるが上下に拡張する。(3)は口縁下に2孔1対の紐孔がある。(1)口径19.9cm、(2)口径22.9cm、底径7.8cm、(3)口径12.9cm、(4)口径18.0cm。

壺C(5) 口縁部の外反の度合いは少ない。口縁端部はほとんど拡張しない。口径12.7cm。

壺E(6) 口縁部は強く屈曲して内傾する。口縁部上下端は刻み目を施す。口径32.9cm。

高杯B(7) 杯部のみ残存。口縁端部はわずかに下外方へ拡張する。口縁部内端面の凸帶は断面三角状を呈す。口径12.8cm。

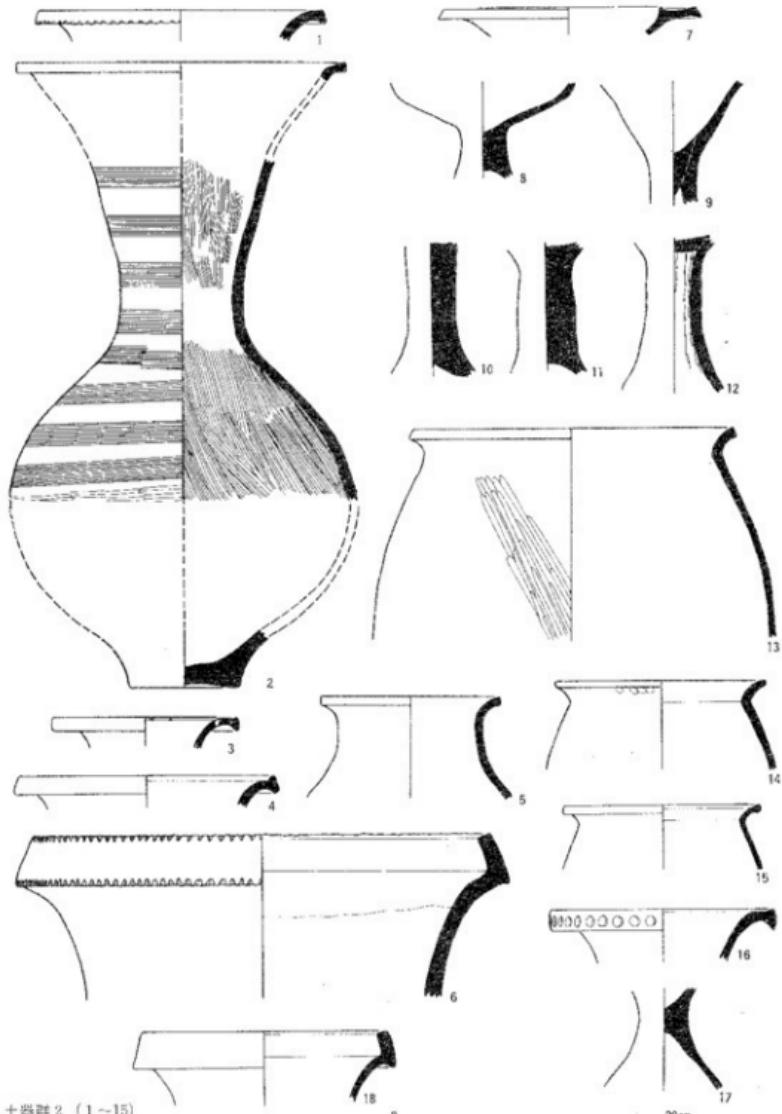
高杯(8~12) (8)は楕円形の杯部をもつが、口縁部は欠失している。脚柱部は半中実。(9)は漏斗形の杯部をもつ。口縁部は欠失している。脚柱部は半中実。(10)~(12)は脚柱部のみ残存。(10)(11)は中実の脚柱部。(12)は中空の脚柱部で、杯部との接合は、円板充填法による。内面にはしづり目が残る。土器群2 (L.N.12) 出土の高杯のうち、中空の脚柱部をもつものはこの1点だけである。

鉢B 溝2 (L.N.53) 出土の鉢(33)と酷似する。

甕A(14、15) 口縁端部が丸くおさまる(14)とわずかに上下に肥厚する(15)がある。(14)の口縁部外面には指おさえ痕が残る。(15)の口縁部内外面は横なで調整。(14)は口縁部内面に、(15)は内外面ともに炭化物質が付着している。(15)の胎土は生駒西麓産。(14)口径14.7cm、(15)口径13.1cm。

甕B(13) 口縁端部はほとんど拡張しない。口縁部内外面ともに横なで、体部外面は斜め方向のへら磨きを施す。内外面ともに炭化物質が付着している。胎土は生駒西麓産。口径22.2cm。

甕C 口縁部のみ残存。落ち込み2 (L.N.110) 出土の甕(42)と酷似するが、土器群2 (L.N.12) 出土の甕Cは口縁端面に刺文文が施されている。胎土は生駒西麓産。土器群2 (L.N.12) 出土の甕Cはこの1点だけである。



插図10 弥生土器

満10 (L.N.67) (挿図10 16, 17)

壺A 高杯脚部が出土している。

壺A(16) 口縁端部は上下に拡張する。口縁部外面は円形浮文が付されている。口径15.6cm。

高杯(17) 脚柱部のみ残存。脚柱部は半中実。

4 A 区ピット (L.N.261) (挿図10 18)

壺E が出土している。

壺E(18) 口縁部は屈曲して内傾する。口縁端部下端は下方へ突出する。口径17.6cm。

土器群1 (L.N.11) (挿図11 19~30)

壺A、壺C、壺D、壺E、高杯、甕A、甕B が出土している。

壺A(19, 20) 口縁端部が下方へ拡張する(19)と下方へ突出する(20)がある。ともに端部は貼り付けによるため、接合時の指おきえ痕が口縁下端内面に残る。(19)の外面は口縁部に簾状文と刺突文が、頸部は簾状文で飾る。胎土は生駒西麓産。(20)は外面を簾状文で飾る。(19)口径22.7cm、(20)口径21.0cm。

壺C(22, 23) 口縁端部が下方へわずかに突出する(22)と上方へ拡張する(23)とがある。(22)の口縁部外面は横なで調整。口縁部外面には刻み目が施されている。(23)は口縁部外面に凹線文が2条施されている。口縁下に2孔一対の紐孔が穿たれている。(22)口径18.2cm、(23)口径23.1cm。

壺D(21) 丈高的器体に短い口頸部をもつ。口縁端部は下方へわずかに突出する。口縁部は内外面とも横なで調整。体部外面は縱方向の刷毛目が施されている。外面には炭化物質が付着している。体部下半約 $\frac{1}{4}$ と底部にかけて黒斑がみられる。口径12.6cm、胴部径22.1cm、底部径6.2cm、器高28.5cm。

壺E(24) 口縁部は屈曲して内傾する。口縁端部下端は下方へわずかに突出する。口縁部外面には凹線文が1条施されている。口縁部外面と頸部に黒斑がある。口径19.5cm。

高杯(25) 脚柱部のみ残存。中実の脚柱部。

甕A(26) 口縁端部は丸くおさまる。口径9.1cm。

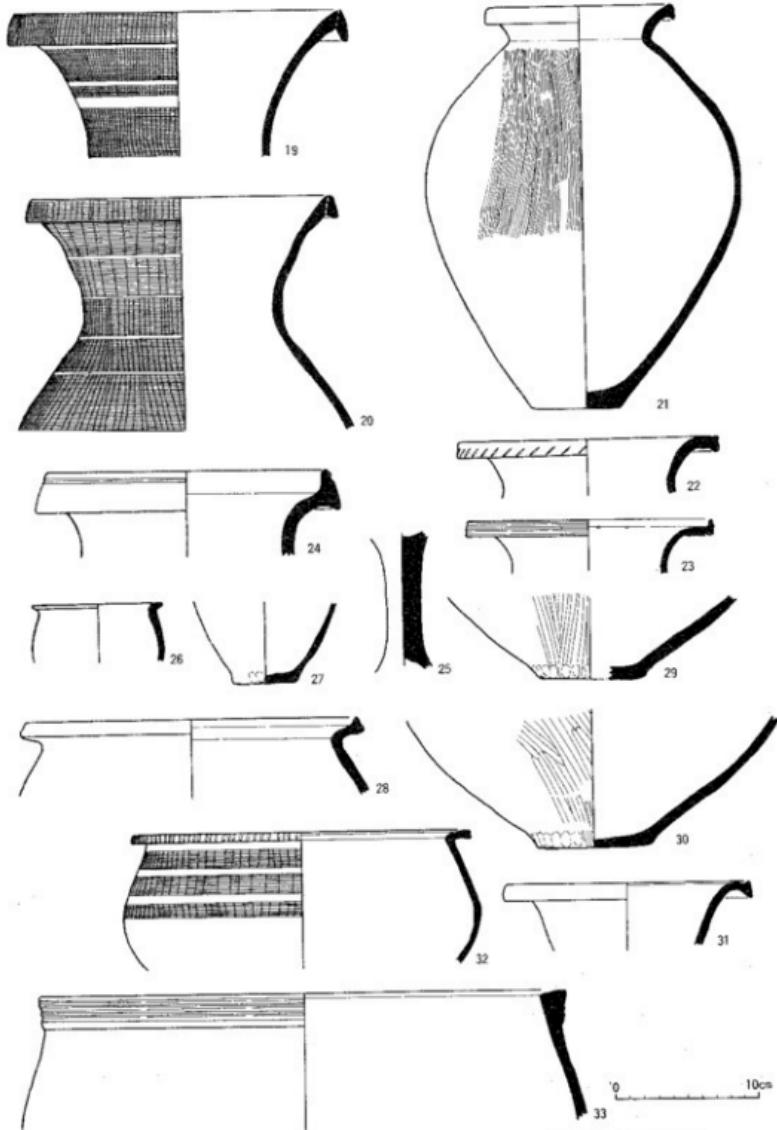
甕B(28) 口縁端部は上方へ突出する。口径23.1cm。

底部(27, 28, 30) すべて平底であるが、胴部のあまり張り出さないもの(27)と張りだすものの(29)(30)がある。すべて外面にへら磨きが施されているが、(27)は不明瞭である。底部外面には指おきえ痕が残る。(27)底径4.4cm、(29)底径7.6cm、(30)底径8.2cm。

満2 (L.N.53) (挿図11 31~33)

壺A、鉢B、甕A が出土している。

壺A(31) 口縁端部は上下にわずかに拡張する。口径17.0cm。



土器群1 (19~30)
満2 (31~33)

挿図11 弥生土器

鉢B(32、33) 丸みをもつ器体に外折する口縁部をもつ(32)と段状の口縁部をもつ(33)がある。(32)の口縁部外面は刻み目が、体部上半は1単位11本の簾状文が3条施されている。(33)の口縁部外面は凹線文が3条施されている。(32)口径23.6cm、(33)口径37.0cm。

落ち込み1 (L.N.50)(插図12-34、35)

壺A、高杯A、鉢B、甕が出土している。

壺A(34) 口縁端部は下方へ拡張する。口縁部には貼りたしの痕跡が段になって明瞭に残っている。口縁部外面には1単位9本の簾状文と刺突文が、内面には円形浮文が付されている。口径28.4cm。

高杯A 浅い椀状の杯部をもつ直口の高杯で、口縁部外面には列点文が施されている。胎土は生駒西麓産である。

鉢B 段状の口縁部をもつ鉢で2点出土している。口縁部に凹線文、体部に波状文の施されたものと口縁部に簾状文の施されたものがある。

底部(35) あげ底の底部片である。底径6.1cm。

落ち込み2 (L.N.110)(插図12-36~43)

壺A、高杯B、壺A、甕B、甕Cが出土している。

壺A(36) 口縁端部は下方へ突出する。口縁端部は貼り付けによるため、接合時の指おさえ痕が口縁下端内面に残る。胎土は生駒西麓産である。口径28.0cm。

高杯B(38) 杯部のみ残存。口縁端部は内傾気味に垂下する。口縁部内端面の内帯は断面四角形状を呈す。体部外面は縱方向のへら磨きが施されている。内面および口縁部上面には炭化物質が付着している。胎土は生駒西麓産である。口径21.3cm。

高杯(37) 傷部のみ残存。端部は上方にわずかに拡張する。傷部径12.0cm。

甕A(39、40) 口縁端部は丸くおさまる。(40)の内面には指おさえ痕が残る。口縁端部上端には炭化物質が付着している。胎土は生駒西麓産である。(39)口径8.8cm、(40)口径15.2cm。

甕B(41) 口縁端部はわずかに下方へ突出する。口径21.0cm。

甕C(42) 口縁端部は下方に拡張する。口縁部は内外面とも横なで調整。体部内面は横方向に粗い刷毛目を、外面は横向方向にへら磨きを施す。胎土は生駒西麓産である。口径38.2cm。

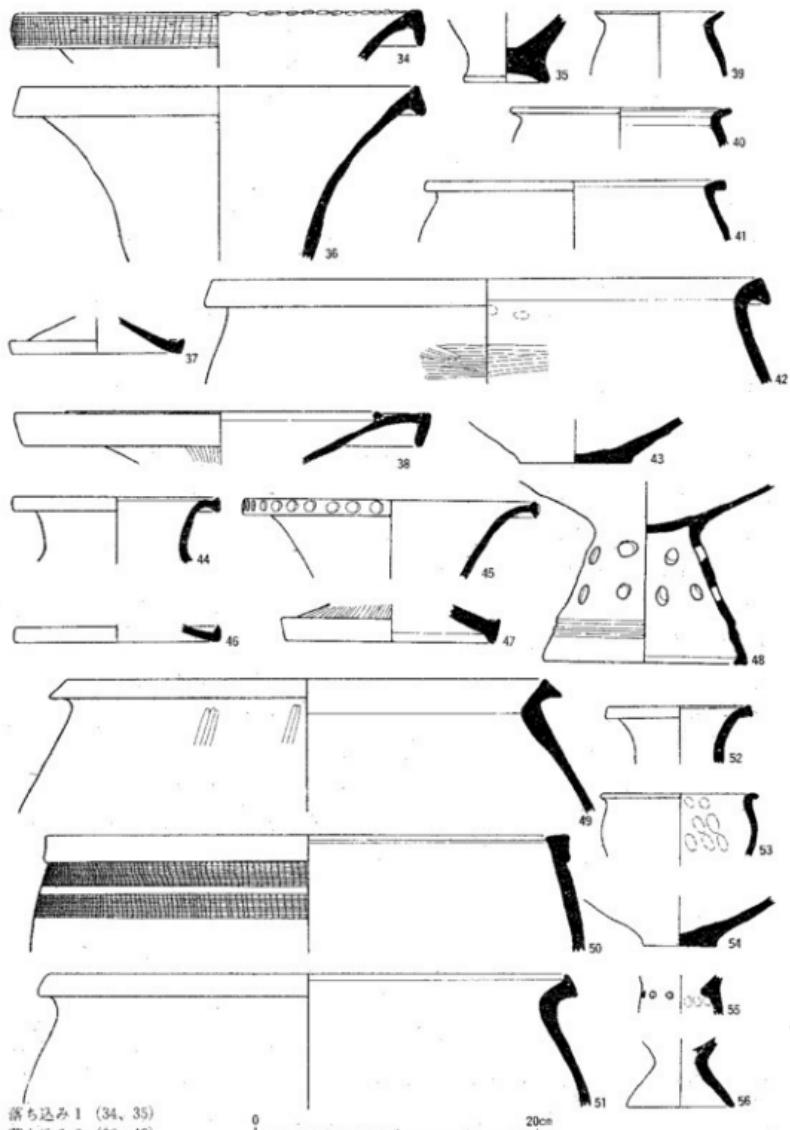
底部(43) 平底である。底径9.8cm。

溝8 (L.N.81)(插図12-44~49)

壺A、壺C、高杯、台付鉢、甕Cが出土している。

壺A(45) 口縁端部はわずかであるが上下に拡張する。口縁部外面には円形浮文が付されている。口径20.6cm。

甕C(44) 口縁端部はわずかであるが上下に拡張する。口径14.4cm。



詰ち込み1 (34、35)
落ち込み2 (36~43)
満8 (44~49) 満9 (50、51)
堆積層 (52~56)

0 20cm

插図12 弥生土器

高杯(46、47) 榻部のみ残存。(46)の端部は上方にわずかに拡張する。胎土は生駒西麓産である。(47)の端部は上下に拡張する。端部は内外面ともに横なで調整。外面は縦方向のへら磨きを施す。(46) 榻部径14.5cm、(47) 榻部径14.8cm。

台付鉢(48) 口縁部は欠失している。脚部は斜めに直線的に開く。裾端部は内方へ突出して丸みをもつ。脚部には円孔を2段に穿ち、凹線を2条めぐらしている。接合は円板充填法による。裾部径14.0cm。

甕C(49) 口縁端部は下方へ拡張する。体部は張りだす。口縁部は横なで調整。体部外面は縦方向にへら磨きを施す。口径33.6cm。

溝9(L.N.73)(挿図12-50、51)

鉢B、甕Cが出土している。

鉢B(50) 段状の口縁部をもつ。口縁部は横なで調整。体部には1単位13本の簾状文を2条施す。口径36.6cm。

甕C(51) 短く立ちあがったのち外反する口縁部をもつ。口縁端部は上下にわずかに拡張する。体部は張り出す。口縁部は横なで調整。口径36.6cm。

堆積層(挿図12-52~56)

壺A、壺B、高杯B、鉢B、甕が出土している。

壺B(52) 口縁端部は上下にわずかに拡張する。口縁部内外面は横なで調整。口径10.0cm。
(4 A区第4層)

高杯(55) 脚柱部のみ残存。脚柱部には11方向に円孔を穿っているが、貫通しているのは1孔だけである。胎土は生駒西麓産である。(3 A区第6層)

台部(56) 台付鉢の台部片と思われる。脚部はわずかに内湾したち大きく開く。裾端部は丸くおさまる。接合は円板充填法による。裾部径7.2cm。(4 A区地山直上)

甕A(53) 口縁端部は丸くおさまる。体部内面は指ねさえ痕が残る。口径10.6cm。(4 B区第5層)

底部(54) 平底である。体部は大きく張り出す。底径5.0cm。(第5層)

2. 土 師 器

土師器は調査区域のはば全域から出土しているが、その大半は溝8(L.N.81)と溝10(L.N.67)から出土している。出土量は須恵器に比べると少なく、また、小破片が多い。

器種としては杯、皿、高杯、甕、鍋、銅釜がある。また、器体から離れた把手もかなり出土している。

出土地点	遺構番号	出土地点	遺構番号	出土地点	遺構番号	出土地点	遺構番号
溝1	L.N.51	溝12	L.N.251	落ち込み4	L.N.319		L.N.260, L.N.277, L.N.372
溝3	L.N.72	溝13	L.N.263	落ち込み5	L.N.273		L.N.375, L.N.376, L.N.377
溝4	L.N.52	溝14	L.N.253				L.N.378, L.N.385, L.N.387
溝7	L.N.31	土塗3	L.N.275				L.N.388, L.N.389, L.N.392
溝8	L.N.81	土器群2	L.N.12	建物1	L.N.254, L.N.255 L.N.256, L.N.257 L.N.283, L.N.284 L.N.312, L.N.391 L.N.400	1B区ピット	L.N.396, L.N.398, L.N.400 L.N.429, L.N.436, L.N.441
溝9	L.N.73	落ち込み1	L.N.50	建物2	L.N.413, L.N.435	1C区ピット	L.N.293, L.N.299, L.N.300 L.N.303, L.N.309, L.N.310
溝10	L.N.67	落ち込み2	L.N.110	建物4	L.N.445	2C区ピット	L.N.32, L.N.75, L.N.76
溝11	L.N.58	落ち込み3	L.N.23	1A区ピット	L.N.268, L.N.421 L.N.431	3A区ピット	L.N.14, L.N.15, L.N.252 L.N.256, L.N.259
				2A区ピット	L.N.71, L.N.250	4B区ピット	

表4 土器出土地点一覧表

表3の出土地点以外に堆積層からも出土している。

弥生土器と同様に、観察の中に調整の記述していないものは磨滅もしくは剥離によるための調整不明である。

溝12 (L.N.251) (挿図13 1, 2)

皿、高杯、甕が出土している。

高杯(1, 2)(1)は完形品で、丸みをもつ杯部の底部には段が認められる。口縁部は大きく開く。口縁端部は尖り気味である。器壁はきわめて薄い。脚部はなだらかに開く。脚柱部外面は縦方向のなで調整。内面にはしづり目が残る。裾部には指おさえ痕が2段以上並んで残り、凹凸が目立つ。杯部と脚部の接合は挿入法による。(2)は脚部片で裾部の開きは(1)より大きい。調整は(1)と変わらない。(1)口径16.6cm、裾部径9.5cm、器高12.4cm、(2)裾部径11.0cm。

溝4 (L.N.52) (挿図13 3, 4)

杯、高杯の他、把手が出土している。

高杯(4) 中ぶくらみの脚柱部をもつ。外面は縦方向のなで調整。内面にはしづり目が残る。

溝10 (L.N.67) (挿図13 5~9)

杯、高杯、甕、鍋、鍔釜の他に把手が出土している。

杯(5) 丸みをもつ器体で、口縁部は外方へ開く。口縁端部は内傾して凹面をもつ。内外面ともに横なで調整を施すが、底部外面には指おさえ痕が残る。口径13.7cm、器高4.3cm。

甕(6, 7) 口縁部が大きく外反するもの(6)とゆるやかに外反するもの(7)とがある。(6)は口縁端部が上方へ丸くふくらむ。ともに口縁部外面は横なで調整。(6)口径16.4cm、(7)口径23.2cm。

鍋(8) 小型の鍋で、外反する口縁部は短い。口縁部は横なで調整。口径18.8cm。

ミニチュアの高杯(9) 脚部はゆるやかに開く。脚柱部外面は縦方向のなで調整。内面はなで調整。縁部は内外面ともに指おさえている。脚部上端は右まわり方向にひねった痕跡が残る。縁部径5.6cm。

溝8 (L.N.81) (挿図13 10~23)

杯、皿、高杯、甕、鍋、鋤釜の他、台部片と把手が出土している。

杯(10) 丸みをもつ器体で、口縁部は外方へ開く。口縁端部は内傾して面をもつ。口縁部外面は横なで調整。底部はなでているが、指おさえ痕も残る。内面には中心点から正放射状に暗文がのびる。口径12.2cm、器高3.7cm。

皿(11、12) 底部から直線状に開く口縁部をもつ(11)と内湾したのち開く口縁部をもつ(12)とがある。(11)口径13.7cm、器高2.0cm、(12)口径16.0cm、器高2.5cm。

高杯(14) 脚部と縁部の境で屈曲して開く縁部をもつ。脚柱部外面は縦方向のなで調整。内面にはしづり目が残る。縁部は指おさえ痕が2段以上並んで残り、凹凸が目立つ。縁部径11.2cm。

台部(15) 外方へわずかに開く台部片で、端部は丸くおさまる。縁部径12.5cm。

甕(16~19、21) 口縁部が外反するものとほぼ直立するもの(21)がある。口縁部の短い(16)(17)の端部は丸くおさまる。口縁部は内外面とも横なで調整。(19)の口縁部も短いが、外方へ屈曲して開き、端部上面で平坦な面をもつ。口縁部は内外面とも横なで調整。口縁部と肩部の境にはわずかであるが刷毛目が認められる。(17)(19)は肩部に段がつく。(21)の口縁部は長くほぼ直立し、端部は内側へ丸くふくらみをもつ。体部はあまり張り出さない。内面には指おさえ痕が残る。(16)口径15.8cm、(17)口径15.0cm、(18)口径16.6cm、(19)口径26.6cm、(21)口径16.4cm。

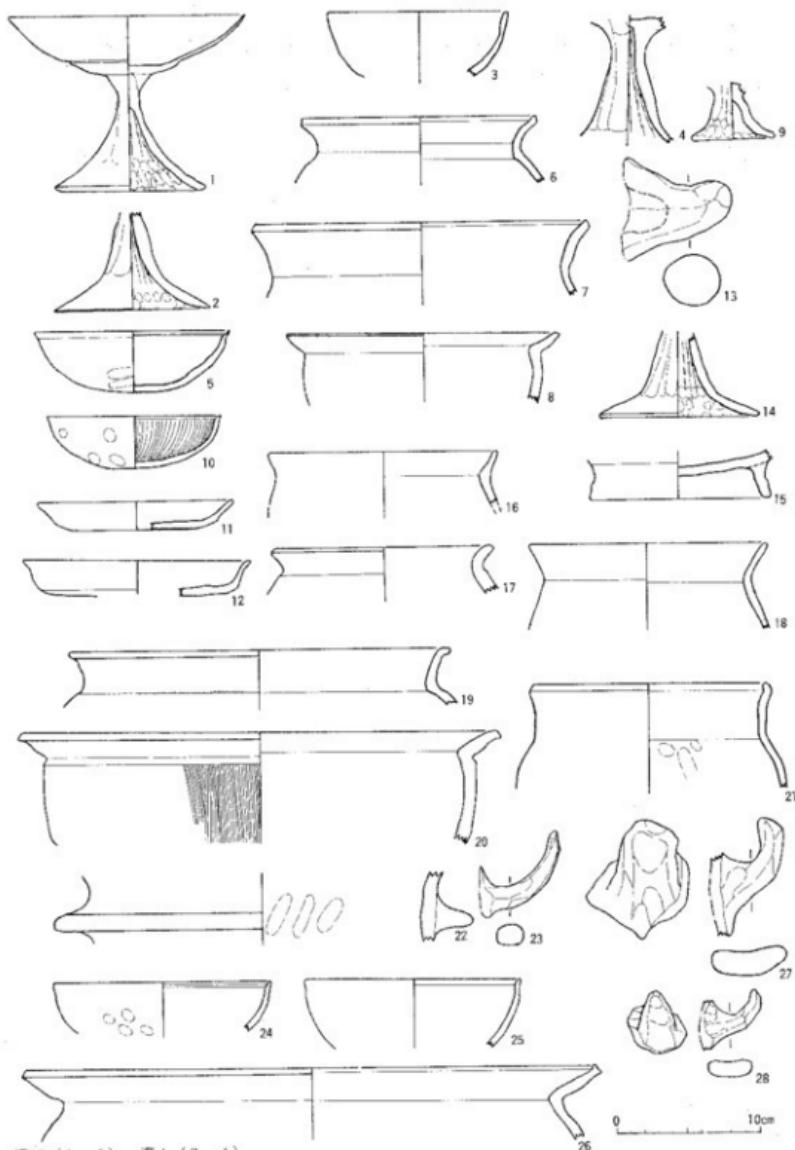
鍋(20) 大型の鍋で、口縁部は短く、大きく外傾する。端部は下方へわずかにふくらむ。肩部には段がつく。口縁部は内外面ともに横なで調整。体部外面は刷毛目、内面はなで調整が施されている。口径33.4cm。

鋤釜(21) 水平にのびる鋤をもつ。鋤は貼り付けてある。内面は指おさえ痕が残る。胎土は生駒西麓産である。鋤部径29.5cm、鋤幅2.5cm。

把手(13、23) 断面円形の把手である。(13)は太い把手で、一部空洞になっている。(23)は湾曲した細い角状の把手で、端部は尖る。

堆積層 (挿図13 24~28)

杯(24、25) 底部は欠失する。口縁部はわずかに開き気味である。端部は内傾して凹面をもつ(24)と平坦面をもつ(25)がある。口縁部は内外面とも横なで調整。(24)の外面には指おさえ



満12 (1、2) 満4 (3、4)
満10 (5~9) 満8 (10~23)
堆積層 (24~28)

摺図13 土師器

痕が残る。(24)口径15.4cm、(25)口径15.0cm。(24)(第5層)、(25)(4B区第5層)

甕(26) 大型の甕で、口縁部は大きく外反する。端部は上方へわずかに拡張する。口径20.2cm。(1A区第5層)

把手(27、28) 湾曲した舌状の把手で、端部は尖る。体部との接合は貼り付けによる。(27)(第5層)、(28)(1A区第5層)

3. 須 惠 器

須恵器は今回の調査で最も多く出土した。調査区域のほぼ全域から出土しているが、土師器と同様に、溝8(L.N.81)と溝10(L.N.67)からの出土が大半を占める。

出土地点	遺構番号	出土地点	遺構番号	出土地点	遺構番号	出土地点	遺構番号
溝1	L.N.51	溝14	L.N.253	建物1	L.N.255, L.N.256 L.N.258, L.N.284 L.N.312, L.N.313 L.N.391, L.N.400	1B区ピット	L.N.260, L.N.277, L.N.372 L.N.375, L.N.377, L.N.378 L.N.386, L.N.387, L.N.389 L.N.392, L.N.408
溝2	L.N.53	土器群2	L.N.12				
溝3	L.N.72	落ち込み1	L.N.50	建物5	L.N.428	1C区ピット	L.N.294, L.N.329, L.N.335 L.N.340, L.N.342, L.N.354 L.N.357, L.N.454
溝4	L.N.52	落ち込み2	L.N.110	建物6	L.N.280	1D区ピット	L.N.281, L.N.363, L.N.366 L.N.369, L.N.430
溝7	L.N.31	落ち込み3	L.N.23	建物7	L.N.390	2B区ピット	L.N.59, L.N.60, L.N.61 L.N.62, L.N.64
溝9	L.N.73	落ち込み4	L.N.319	1A区ピット	L.N.268, L.N.421	2C区ピット	L.N.32, L.N.75, L.N.76
溝11	L.N.58	落ち込み5	L.N.273	1A,B区ピット	L.N.278	3A区ピット	L.N.54
溝12	L.N.251	建物4	L.N.445	2A区ピット	L.N.71	4A区ピット	

表5 須恵器出土地点一覧表

その他、堆積層からも出土している。器種としては杯蓋、杯、高杯、高杯用蓋、甕(短頸甕、長頸甕、横瓶、提瓶)、壺用蓋、壺、器台、甕がある。

観察の中で調整について特に記述をしていないものは、回転などで調整を施している。また、蓋杯の記述の中でなでを加えるとあるのは、回転での上からなでを施しているということである。へら削りとあるのはすべて回転へら削りのことである。また、右まわり、左まわりとあるのはすべてへら削り時のロクロの回転方向のことである。焼成について特に記述のないものはすべて堅敏である。以下、杯蓋、杯、高杯、甕は口径および形態の特徴によって分類して記述する。

杯蓋A 口径13cm以上で、丸い天井部をもつもの。

杯蓋B 口径13cm以上で、扁平な天井部をもつもの。

杯蓋C 口径12cm以下で、杯蓋A、杯蓋Bを小型化したもの。

杯蓋D 天井部中央に乳頭状もしくは宝珠形のつまみの付くもの。

杯A 口径12cm以上で、丸みのある器体をもつもの。

- 杯B 口径12cm以上で、扁平な器体をもつもの。
- 杯C 口径11cm以下で、杯A、杯Bを小型化したもの。
- 杯D 受部をもたないもの。
- 杯E 底部に高台の付くもの。
- 高杯A 長脚1段透しのもの。
- 高杯B 長脚2段透しのもの。
- 高杯C 短脚のもの。
- 甕A 口径が20cm以下の小型のもの。
- 甕B 口径が20~25cmの中型のもの。
- 甕C 口径が25cm以上の大型のもの。

満12 (L.N.251) (挿図14 1~6)

杯蓋、杯、高杯、甕、甕が出土している。

杯蓋A(1、2) 天井部と口縁部の境に凹線がめぐる(1)と境の不明瞭な(2)がある。ともに口縁部は丸みをもって開き、端部は丸くおさまる。(1)の大井部は約 $\frac{1}{2}$ をへら削りする。天井部内面にはなでを加える。大井部外面にはへら記号がある。(2)は軟質である上に磨滅が著しいため調整は不明である。(1)口径13.2cm、器高4.4cm、(2)口径13.4cm、器高4.1cm。

杯A(3、4) やや内傾するたちあがりは、屈曲してのびるもの(3)と直線状にのびるもの(4)がある。口縁端部はともに丸くおさまる。底部は約 $\frac{1}{2}$ をへら削りする。(3)口径12.2cm、受部径14.6cm、右まわり、(4)口径13.2cm、受部径15.1cm、器高4.1cm、左まわり。

杯B(5) やや内傾するたちあがりは、屈曲してのびる。口縁端部は尖り気味である。底部は約 $\frac{1}{2}$ をへら削りする。口径12.9cm、受部径15.2cm、右まわり。

高杯A(6) 脚部のみ残存。裾部はふんばる形態をもつ。脚部と裾部の境には凹線がめぐる。裾部径9.6cm。

満10 (L.N.67) (挿図14、15 7~48)

杯蓋、杯、高杯、壺(短頸壺、長頸壺、直口壺、横瓶、提瓶)、甕、器台、甕が出土している。

杯蓋B(7、8) 天井部は欠失する。口縁部は丸みをもって開き、端部は内傾して面をもつ(7)と丸くおさまる(8)がある。(8)は口縁端部外面に斜めの条線がめぐる。(7)口径14.4cm、(8)口径14.8cm。

杯蓋C(9~11) 丸みをもった天井部で、口縁部との境が不明瞭な(9)(11)とかすかにではあるが境に凹線のめぐる(10)がある。(11)は(9)(10)に比べて天井部までの高さが高い。口縁部は大きく開く(9)(10)と天井部からほぼ垂直に下る(11)がある。口縁端部は(9)が内傾し

て面をもつ。(10)は丸くおさまる。(11)は内傾して段をもつ。天井部は約 $\frac{2}{3}$ をへら削りする。(11)の天井部内面はなでを加える。(9)(10)は天井部外面にへら記号がある。(9)口径12.5cm、器高3.7cm、右まわり、(10)口径12.0cm、右まわり、(11)口径10.7cm、右まわり。

杯A(12~14) 短く、内傾するたちあがりは、屈曲してのびる。口縁端部は丸くおさまる。底部は(12)(13)が約 $\frac{2}{3}$ を、(14)は約 $\frac{1}{2}$ をへら削りする。内底面にはなでを加える。(12)受部径13.1cm、右まわり、(13)口径12.6cm、受部径14.9cm、右まわり、(14)口径12.3cm、受部径14.2cm、器高3.7cm、右まわり。

杯B(15~21) 短く、内傾するたちあがりは、直線状にのびるもの(16)(17)(21)と屈曲してのびるもの(18)~(20)がある。底部は(15)(17)が約 $\frac{2}{3}$ を、他は約 $\frac{1}{2}$ をへら削りする。(15)口径14.0cm、受部径16.1cm、(16)口径13.0cm、受部径15.3cm、右まわり、(17)口径13.2cm、受部径15.3cm、(18)口径13.0cm、受部径15.5cm、(19)口径14.2cm、受部径17.1cm、(20)口径12.6cm、受部径15.4cm、(21)口径11.8cm、受部径14.0cm。

杯C(22~24) 器体は丸みをもつ。たちあがりは内傾するが、短いもの(22)(24)と長いもの(23)がある。たちあがりは屈曲してのびる。口縁端部は尖り気味のもの(22)(23)と丸くおさまるもの(24)がある。(22)(23)は底部の約 $\frac{1}{2}$ をへら削りを施しているが、(22)の底部中央はへら削りがおよんでいない。(24)の底部はへら切りのままである。すべて内底面にはなでを加える。(22)(24)のたちあがりはオリコミ手法による。(23)(24)は底部外面にへら記号がある。(23)の外面には自然釉が付着している。(24)は軟質で灰白色を呈す。(22)口径10.6cm、受部径13.0cm、器高3.6cm、左まわり、(23)口径10.3cm、受部径12.3cm、器高3.4cm、(24)口径10.6cm、受部径12.7cm、器高3.4cm。

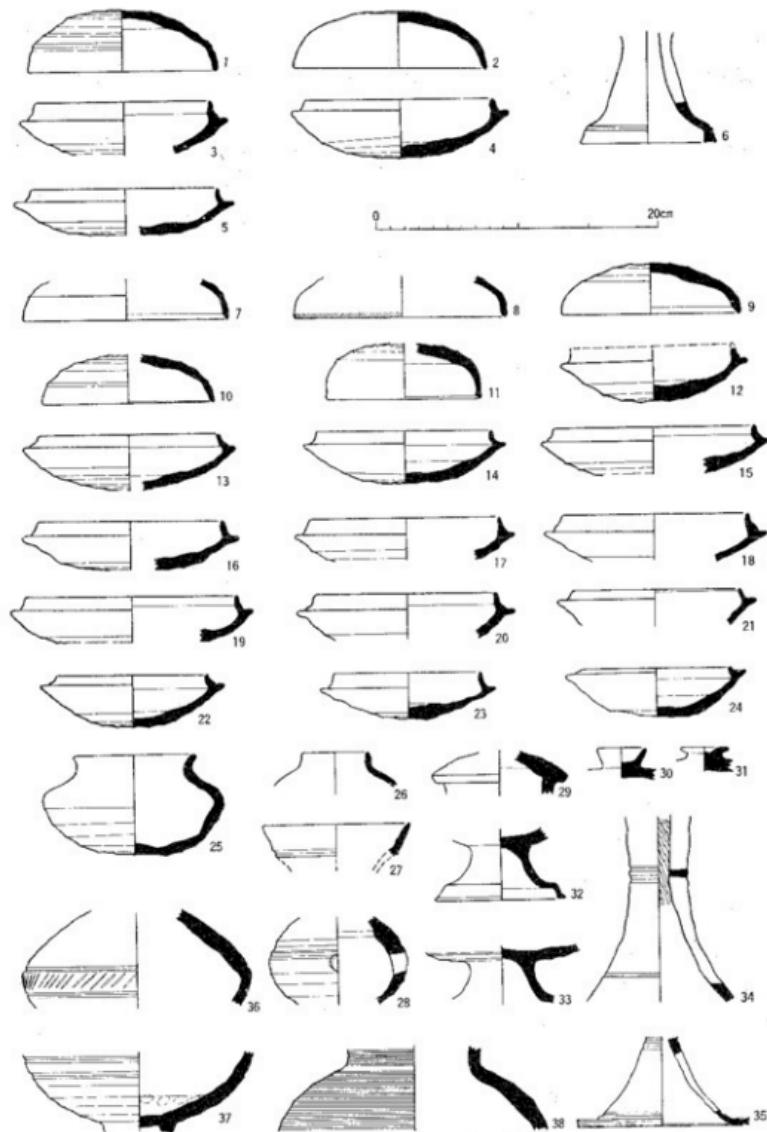
短頸壺(25、26) わずかに外反する口縁部をもつ(25)と直立する口縁部をもつ(26)がある。(25)は完形品。扁球形の器體で、肩部は張り出す。肩部以下はへら削りする。軟質で灰白色を呈す。(26)は肩部以下が消失する。自然釉をうけるが、剥落する。(25)口径8.3cm、器高7.1cm、右まわり、(26)口径4.5cm。

躰(27、28) (27)の頸部は欠失して不明であるが、頸部との境には明瞭に段がつく。口縁端部は尖り気味である。(28)は体部のみ残存。体部は丸味をもつ。肩部には凹線が2条めぐる。体部下半はへら削りする。(27)口径10.2cm、(28)右まわり。

壺用蓋(29) 長頸壺の蓋と思われる。器壁は厚い。天井部外面はへら切りのままである。内面にはなでを加える。

つまみ(30、31) ともに中凹みのつまみである。(31)は扁平なつまみである。

高杯B(34、35) 脚部のみ残存。脚柱部は2条1組の凹線で区画する。裾部は大きく開く。(34)の内面にはしづり目が残る。透しは(34)が2方向に、(35)は3方向につく。(35)裾部径12.1



満12 (1~6)
満10 (7~38)

挿図14 須恵器

cm。

高杯C(32) 脚部のみ残存。裾部はふんばる形態をもつ。軟質で白灰色を呈す。裾部径9.1cm。

長頸壺(36~38) (36)は口頸部と底部が消失する。胴部に最大径をもつ。肩部と胴部の境に1条、胴部に1条凹線をめぐらし、その間を斜め方向の刻み目で飾る。(37)は体部上半と脚部が消失する台付長頸壺で、胴部に2条凹線をめぐらしている。脚部の接合部が残っていて、3方向に透しのはいる脚部であったことが判る。底部外面はへら削り調整。内底面にはなでが放射状に加えられている。(38)は口縁部と胴部以下が消失する。全体にかき目を施しているが、体部はへら削りのあとで施している。内面はなでが加えられている。(36)胴部径16.1cm。

(33)は台付長頸壺の脚部と思われる。底部には凹線が1条めぐり、その下にはへら削りが施されている。内底面にはなでが加えられている。右まわり。

横瓶(39) 口縁端部と体部下半が消失する。口頸部は外反して短い。体部外面は側面～頸部のつけ根までへら削りする。中央はかき目が一部施されている。体部内面は指おさえ痕が残り、凹凸が著しい。とりわけ、側面の接合部は円周に沿ってそれが目立つ。

壺(40) 口頸部は外反して短い。口縁端部は外方へ丸くふくらみ段をなす。頸部と体部の境にはへら記号が認められる。体部内面には円弧叩き目文が残る。横瓶もしくは提瓶の口頸部と思われる。口径14.4cm。

直口壺(41、42) 口頸部が外上方へ直線状にのびる(41)とゆるやかに外反しながらのびる(42)とがある。(42)の外面には自然釉が付着している。(41)口径8.6cm、(42)口径9.9cm。

甕A(43、44) 口頸部は外反して短い。口縁端部は外方へ丸くふくらみ段をなす。体部外面は平行叩きのちかき目を施す(43)と平行叩きを施す(44)がある。内面はともに円弧叩き目文が残る。(43)口径15.0cm、(44)口径19.7cm。

甕B(46) 口頸部は直立したのち外反して短い。口縁端部は外方へ丸くふくらみ段をなす。口縁部には自然釉が付着している。口径24.7cm。

甕C(45) 口頸部が大きく外反して開く口縁部をもつ。口縁端部は上下に拡張する。体部内面には円弧叩き目文が残る。口径25.2cm。

器台(47、48) 脚柱部中位の破片で、わずかであるが下方にひろがる。2条1組の凹線で区画し、その間には3方向に透しを穿つ。(47)はかき目調整ののちに斜線文で、(48)は斜線文で飾る。

溝8 (L.N.81) (挿図15、16 49~92)

杯蓋、杯、高杯、壺(短頸壺、長頸壺、直口壺、提瓶)、甕、甕が出土している。

杯蓋A(49) 天井部と口縁部の境は不明瞭である。口縁部は丸みをもって開き、端部は丸く

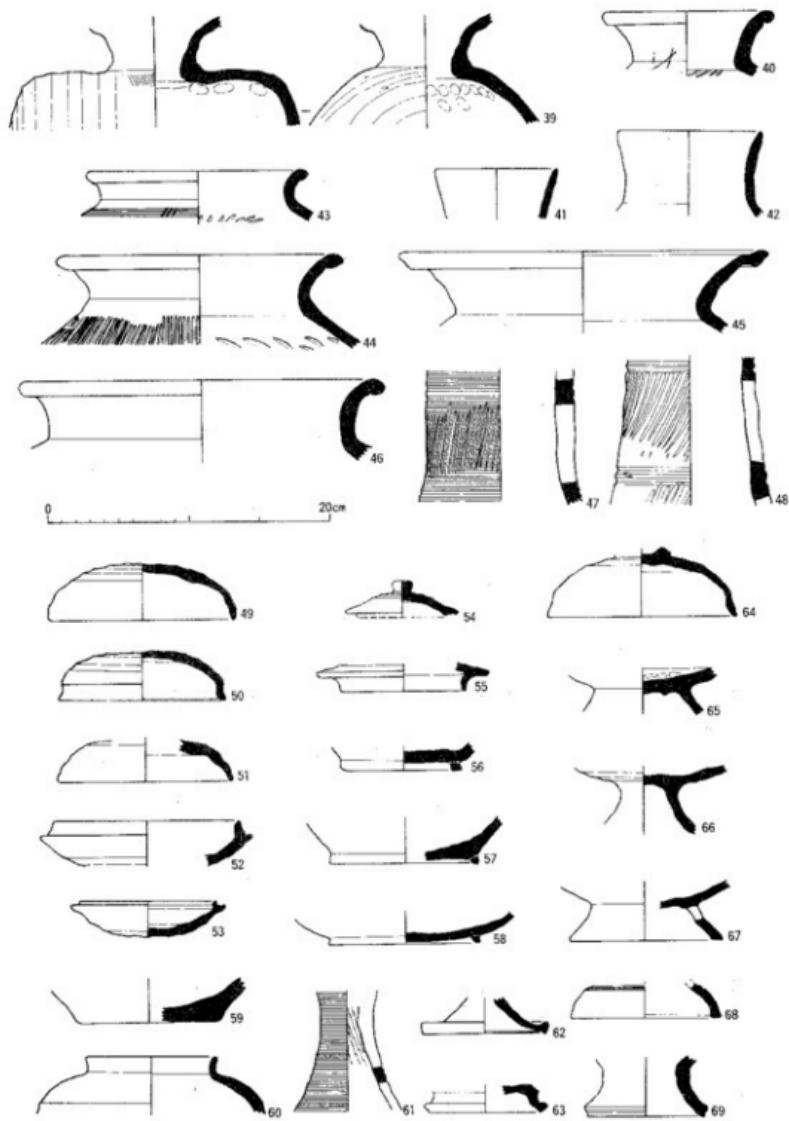


插圖15 須惠器

おさまる。天井部は約 $\frac{1}{2}$ をへら削りする。口径13.0cm、器高4.0cm、右まわり。

杯蓋C(50、51) 扁平な天井部をもつ。(50)の口縁部は内湾したち開く。端部はわずかに内傾して外開き氣味に尖る。天井部は約 $\frac{2}{3}$ をへら削りする。内面にはなでを加える。外面は自然釉をうけるが、剥落する。(51)の口縁部は大きく開き、端部は丸くおさまる。天井部はへら切りのままである。内面にはなでを加える。(50)口径11.8cm、器高3.5cm、右まわり、(51)口径12.3cm。

杯B(52) やや短く、内傾氣味のたちあがりは屈曲してのびる。端部は丸くおさまる。底部は約 $\frac{1}{2}$ をへら削りする。口径13.1cm、受部径15.1cm、右まわり。

杯C(53) 扁平な器体に、短く内傾するたちあがりをもつ。たちあがりは屈曲してのびる。端部は丸くおさまる。底部はへら切りのままである。内底面にはなでを加える。たちあがりはオリコミ手法による。口径9.6cm、受部径11.0cm、器高2.6cm。

杯E(56~58) 底部に高台がつく。高台は低く、わずかであるが外方へふんばる。なかでも(58)の高台はきわめて小さい。(56)は内底面に指おさえ痕が残る。(57)の底部は内外面ともになでが加えられている。(56)底径8.6cm、(57)底径10.5cm、(58)底径10.7cm。

壺用蓋(54、55) (54)は天井部中央に中凹みのつまみをもつ。かえりは口縁端部より下方へ突出している。天井部は約 $\frac{1}{3}$ をへら削りする。内面にはなでを加える。(55)のかえりは内湾氣味に下方へ大きくなる。天井部はへら削りする。かえりはオリコミ手法による。(54)右まわり、(55)かえり部径8.8cm。

底部(59) 厚ぼったい器盤をもつ底部片で、平底である。底部はへら切りのままである。底径10.2cm。

高杯蓋(64) 丸みをもった天井部の中央に中凹みのつまみをもつ。口縁部は丸みをもって大きく開く。端部は尖り氣味である。天井部は約 $\frac{1}{3}$ をへら削りする。内面にはなでを加える。天井部外面にはへら記号が認められる。口径13.2cm、右まわり。

高杯B(61) 脚柱部のみ残存。内面にはしづり目が残る。2条1組の凹線で区画する。外面はかき目を施す。外面には自然釉が付着している。

(62)は高杯Bの裾部片と思われる。裾部径8.7cm。

高杯C(65、66) (65)の脚部は円孔透しが3方向に穿たれている。杯部内底面にはなでを加える。(66)は杯部外面にへら削りを施す。内底面にはなでを加える。内底面にはへら記号が認められる。(66)左まわり。

台部(63、67~69) (63)は外方へ屈折してふんばる形態をもつ。端部内面で接地する。(67)の脚部は4方向に透しを穿つ。(68)は裾部と脚部が段によって区画される。脚柱部には透しがある。(63)裾部径7.8cm、(67)裾部径10.8cm、(68)裾部径10.4cm、(69)裾部径8.2cm。

短頸壺(60) わずかに外傾気味に直立する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。胴部以下は欠失する。胴部はへら削り調整。口径 9.0 cm。

長頸壺(70) 口頭部と胴部下半が欠失する。肩部と胴部の境には凹線が1条めぐる。胴部は斜め方向に1単位13本の列点文を施す。頸部との接合部にはしづり目が残る。肩部外面は自然釉をうけるが、剥落する。

底部(71) 丸底の底部をもつ。器壁は薄い。胴部～底部にかけてへら削りとかき目を施す。内面にはなでを加える。左まわり。

壺(72～74) 横瓶もしくは提瓶の口頭部と思われる。(72)の口頭部はほぼ直立したのち外反する。口縁端部は外方へ丸くふくらみ段をなす。(73)(74)の口頭部は内湾して漏斗状をなす。口縁端部は丸くおさまる。ともに自然釉をうけるが、(73)は剥落する。(72)口径 8.2 cm、(73)口径 5.6 cm、(74)口径 6.8 cm。

直口壺(75) 口頭部は内湾して漏斗状をなす。口縁端部は丸くおさまる。口径 12.0 cm。

壺(79～81) 口頭部は外反して短い。口縁端部は上下に肥厚する(79)(80)と下方に肥厚する(81)とがある。(80)(81)は口縁部外面に凹線が1条めぐる。(79)口径 11.2 cm、(80)口径 11.3 cm、(81)口径 14.3 cm。

罐(76～78) (76)は口縁部のみ残存。頸部との境には段がつく。口縁部は大きく開く。端部は内傾して面をもつ。口縁部外面は櫛描きの波状文で飾るが、文様は不明瞭である。(77)は体部のみ残存。体部は明瞭に肩をつくり、胴部との境に1条、胴部にも1条凹線をめぐらす。その間には1単位10本の列点文を施す。胴部以下はへら削りを施す。(78)は底部のみ残存。器壁は厚い。外面はへら削りを施すが、軟質である上に磨滅のため不明瞭。色調は灰緑色。(76)口径 13.1 cm、(77)右まわり。

壺A(82、87) 口頭部はゆるやかに外反する。(82)の口縁端部は外方へ丸くふくらみをもつ。口縁部外面には沈線が1条めぐる。(87)の口縁端部は拡張せず、凹線が1条めぐる。体部外面には平行叩きを施し、内面には円弧叩き目文が残る。(82)口径 18.2 cm、(87)口径 20.4 cm。

壺B(83～86、88～90) (83)の口頭部は大きく開き、端部は外方へ丸くふくらむ。頸部外面にはかき目が施されている。(84)の口頭部は大きく外反し、端部は上下に肥厚して内面上端で段をもつ。頸部外面にはかき目が施されている。(85)(86)はゆるやかに外反して開く口縁部をもつ。端部は外方へ丸くふくらみ、(86)は口縁部外面に沈線を1条めぐらす。(85)の頸部にはへら記号が認められる。(86)の頸部外面にはかき目が施されている。(88)(89)の口頭部は外反したのち、わずかであるが内湾する。(88)の口縁部外面には凹線が1条めぐる。(89)の口頭部には沈線が1条めぐる。(90)の口頭部はゆるやかに外傾し、口縁端部は外方へふくらんで幅広い面をもつ。体部外面は平行叩きのちかき目を施す。内面は車輪文(星形の型文)が残るが、

一部なでて消している。(83)(85)(86)(88)は自然軸が付着するが、(88)を除いて他は剥落する。
(83)口径24.0cm、(84)21.6cm、(85)23.5cm、(86)22.8cm、(88)20.4cm、(89)20.6cm、(90)22.6cm。

(90)の他に車輪文の残された例として(91)(92)がある。(91)は十字形に、(92)は不明瞭ではあるが、中央から放射状に細い線がのびている。

1B区ピット (L.N.260) (挿図17 93)

杯蓋、杯、高杯、壺が出土している。

杯B(93) たちあがりは短く、ほぼ直立する。口縁端部は丸くおさまる。底部は約 $\frac{1}{2}$ をへら削りする。口径14.3cm、受部径16.5cm、右まわり。

溝9 (L.N.73) (挿図17 94)

杯蓋、杯、高杯、壺、甌、甕が出土している。

杯C(94) 丸みのある器体をもつ。短く、内傾するたちあがりは屈曲してのびる。口縁端部は丸くおさまる。底部は約 $\frac{1}{3}$ をへら削りする。内底面にはなでを加える。外面は自然軸をうけるが、剥落している。底部外面にはへら記号が認められる。内面は茶色を呈す。口径9.6cm、受部径11.6cm、器高3.3cm。

溝2 (L.N.53) (挿図17 95)

杯蓋、杯、台部が出土している。

台部(95) 壁部のみ残存。壁部径12.4cm。

溝4 (L.N.52) (挿図17 96、98)

杯蓋、杯、壺、甌、甕が出土している。

杯C(98) 扁平な器体をもつ。細いたちあがりは短く、内傾する。口縁端部は尖り氣味である。底部はへら切りのままである。内底面にはなでを加える。外面には自然軸が付着している。口径10.8cm、受部径12.8cm、器高2.9cm。

壺(96) 外傾する口頭部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。口径9.0cm。

落ち込み4 (L.N.319) (挿図17 97)

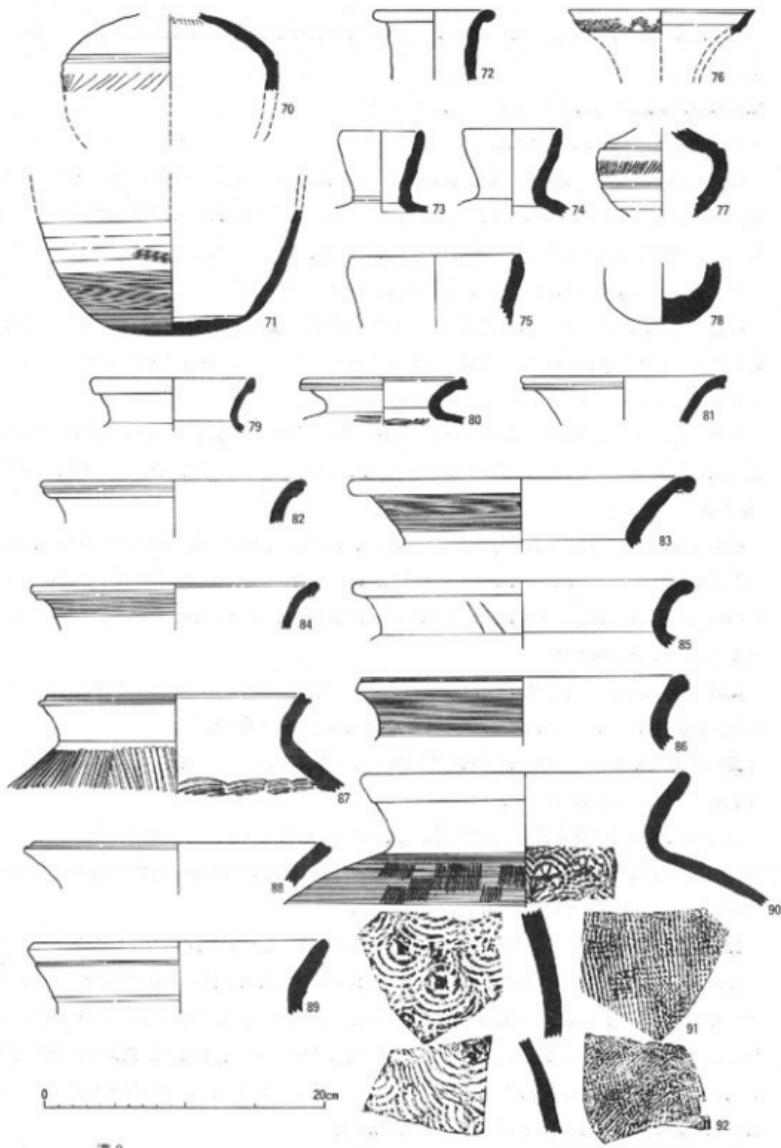
杯C(97) 丸みのある器体をもつ。短く、内傾するたちあがりは屈曲してのびる。口縁端部は内傾して面をもつ。底部は約 $\frac{1}{3}$ をへら削りする。内底面にはなでを加える。受部には重ね焼きの痕跡が残る。口径11.0cm、受部径13.2cm、右まわり。

落ち込み1 (L.N.50) (挿図17 99)

杯蓋、杯、高杯、壺、甌が出土している。

台部(99) 壁部のみ残存。壁部径9.8cm。

1C区ピット (L.N.294) (挿図17 100)



満8

挿図16 須恵器

壺の体部片が1点出土しただけである。外面には平行叩きを施す。内面には車輪文（星形の型文）が残る。

堆積層および表採（捕図17 101~115, 117~127）

杯蓋、杯、高杯、壺、甕が出土している。

杯蓋A(101, 102) (101)は口縁部と天井部の境に凹線がめぐる。口縁部は大きく開く。口縁端部は尖り気味である。天井部は約 $\frac{1}{3}$ をへら削りする。(102)は口縁部と天井部の境でカーブが変わる。口縁部は大きく開く。口縁端部は内傾して面をもつ。天井部は約 $\frac{1}{3}$ をへら削りする。(101)口径13.0cm, (1 A区第5層), (102)口径13.8cm。(第4層)

杯蓋D(104, 105) (104)は乳頭状のつまみが、(105)は宝珠形のつまみが付く。ともに天井部外面はへら削り調整。(104)の内面にはなでが加えられている。(105)は自然軸をうけているが、剥落している。(104)(表採)、(105)(3 A区第6層)

杯A(103) 短く、内傾するたちあがりは屈曲してのびる。口縁端部は内傾して面をもつ。底部外面は約 $\frac{1}{3}$ をへら削りする。底部外面にへら記号が認められる。口径12.0cm、受部径14.3cm。(第6層)

杯E(106, 107) 底部は丸みをもつもの(106)とほぼ平坦なもの(107)とがある。口縁部はともに開き気味である。端部は丸くおさまる。底部はへら削りを施す。内底面にはなでを加える。(106)口径9.9cm、器高3.9cm、右まわり。(3 A区第6層), (107)口径11.2cm、器高3.8cm、右まわり。(3 A区第6層)

高杯C(110, 111) 補部はふんばる形態をもつ。(110)は脚柱部に円孔透しが穿たれている。(110)裾部径9.7cm, (1 A区第4層)、(111)裾部径9.8cm。(第5層)

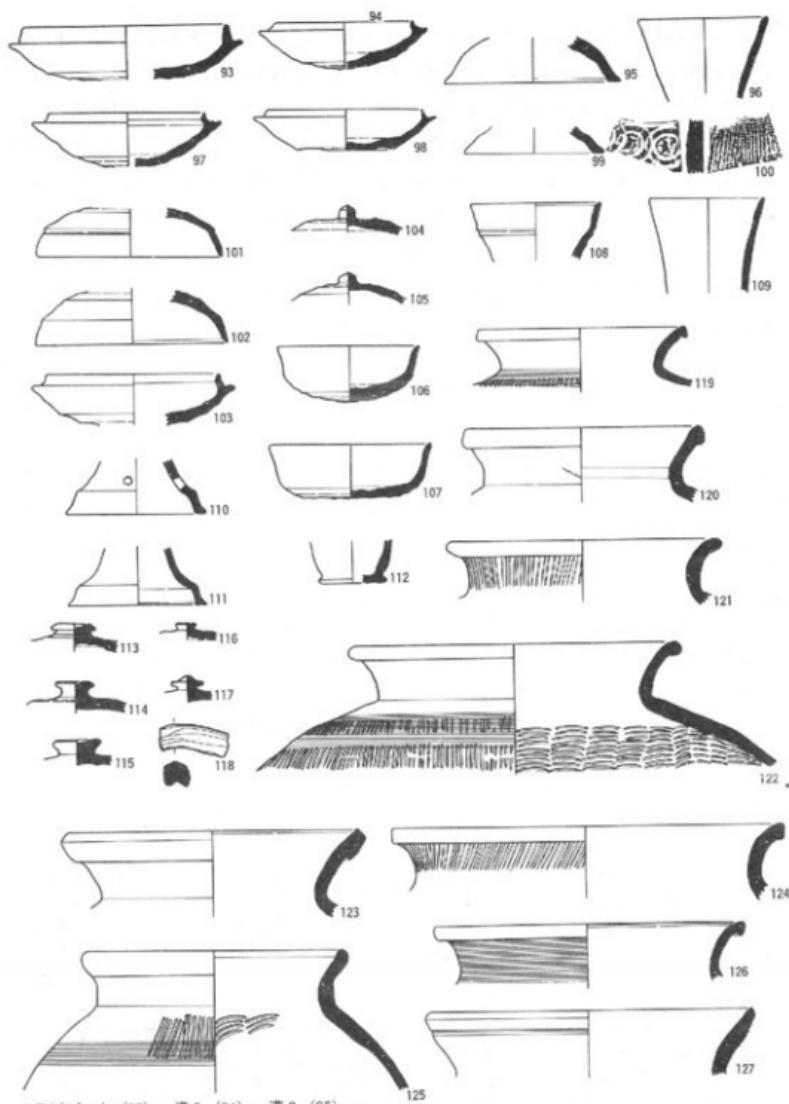
-壺(109, 112, 119) (109)は口頭部のみ残存。口頭部はゆるやかに外反する。口縁端部は尖り気味である。口径8.0cm。(第4層)

(112)は小型の壺の体部片で、底面は横に張り出す。底径4.2cm。(1 A区第5層)

(119)は口頭部のみ残存。口頭部は外反して開き、口縁端部で下外方へ肥厚する。体部外面は平行叩きのちかき目を施す。口径14.6cm。(表採)

壺A(120, 121, 125) (120)(121)の口頭部は直立したのち外反し、口縁端部は外方へ丸くふくらむ。(121)の口縁端部は段をなす。(120)の頭部にはへら記号が認められる。(121)の頭部は不明瞭ではあるが、平行叩きが施された痕跡がある。(125)の口頭部は直立したのち内湾気味に開く。口縁端部は丸くおさまる。体部外面は平行叩きのちかき目を施す。内面には円孤叩き目文が残る。(120)(125)は軟質で白灰色を呈す。(120)口径16.3cm, (3 A区第6層)、(121)口径18.4cm。(表採)、(125)口径18.2cm(4 A区第5層)

甕B(122, 123, 126, 127) (122)の口頭部はゆるやかに外反し、口縁端部は外方へ丸くふく



1B区ピット (93) 溝2 (94) 溝2 (95)

溝4 (96、98) 落ち込み4 (97) 落ち込み1 (99)

1C区ピット (100) 堆積層 (101~115, 117, 118,

120, 122, 125) 表採 (119, 121, 123, 124, 126, 127)

不明 (116)

0 20cm

挿図17 須恵器

らむ。体部外面は平行叩きののちかき目を施す。内面には円弧叩き目文が残る。自然軸をうけるが、剥落する。(123)の口頭部はゆるやかに外反し、口縁端部は外方へ幅広い面をつくり、段をなす。自然軸をうけるが、剥落する。(126)の口頭部はゆるやかに外反し、口縁端部は上下に肥厚して、内面上端で段をもつ。頭部外面にはかき目が施されている。(127)の口頭部は外反したのち、わずかであるが内湾する。口縁端部は拡張しない。頭部に沈線が1条めぐる。口縁部外面には自然軸が付着する。(122)口径22.6cm、(1A区第5層)、(123)口径20.4cm、(表探)、(126)口径21.6cm、(表探)、(127)口径22.6cm。(表探)

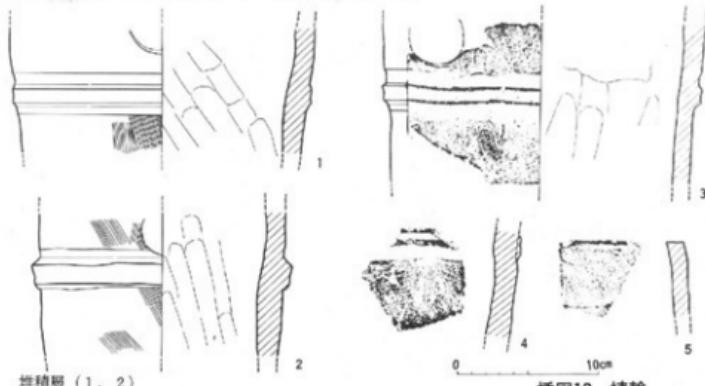
甕C(124) 口頭部は外反して開き、口縁端部は下方へわずかに肥厚する。頭部外面は不明瞭ではあるが、平行叩きが施された痕跡がある。口径27.6cm。(表探)

4. 増輪

埴輪は溝4(L.N.52)から1点、溝8(L.N.81)から3点、溝10(L.N.67)から6点、堆積層から2点出土したほか、表探のものが4点ある。いずれも円筒埴輪で、溝10から出土した口縁部片1点(5)を除いて、他はすべて円筒部片である。全体に磨滅が著しい。溝8から出土した埴輪の中に須恵質のものが2点みられるが、他はすべて土師質のものである。外面調整は斜向する刷毛目だけで、2次調整はみられない。内面調整はなしによる。タガの突出度は低い。透し孔残存のものはすべて円孔である。破片の中に黒斑の認められるものはなかった。須恵質の埴輪は灰茶色を呈するものと灰黒色を呈するものがある。土師質のものは黄褐色を呈す。

(注1) 以上の特徴からみて、今回出土の埴輪は川西氏の編年の中V期に属するものと考えられる。

(注1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」(「考古学雑誌」64-2)



堆積層(1、2)

溝8(3)

溝10(4、5)

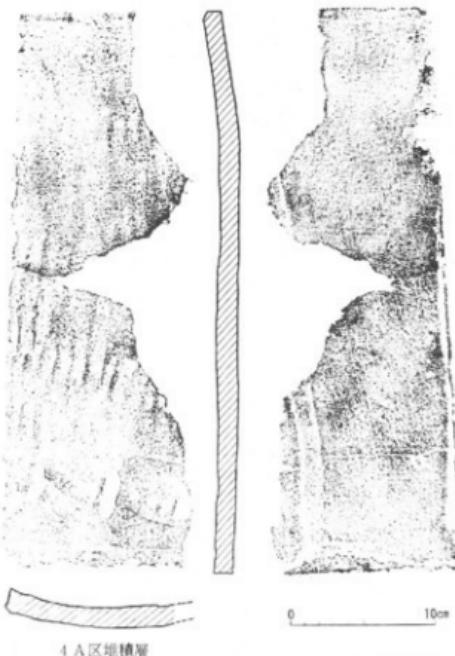
5. 瓦

瓦は溝3（L.N.72）、溝8（L.N.81）、溝13（L.N.263）、落ち込み3（L.N.23）、堆積層から77点出土している。瓦の種類には丸瓦と平瓦がある。いずれも完形のものはない。丸瓦には玉縁の付いたものも認められる。瓦には赤色もしくは淡紅色を呈する軟質のものと青灰色を呈する硬質のものがある。

図示した平瓦は堆積層（第5層）から出土したものである。上面には平行叩き目が、下面には布目が認められる。

焼成は堅緻で、青灰色を呈す

る。長さ40cm、厚さ1.5cmをはかる。この瓦は飛鳥時代のもので、『河内新堂廃寺』の中でIV型式に分類された素弁8葉の軒丸瓦に伴うものである。（注1）



插図19 瓦

(注1) 大阪大学文学部国史研究室『河内新堂廃寺』（『第1期調査報告』、1960年）

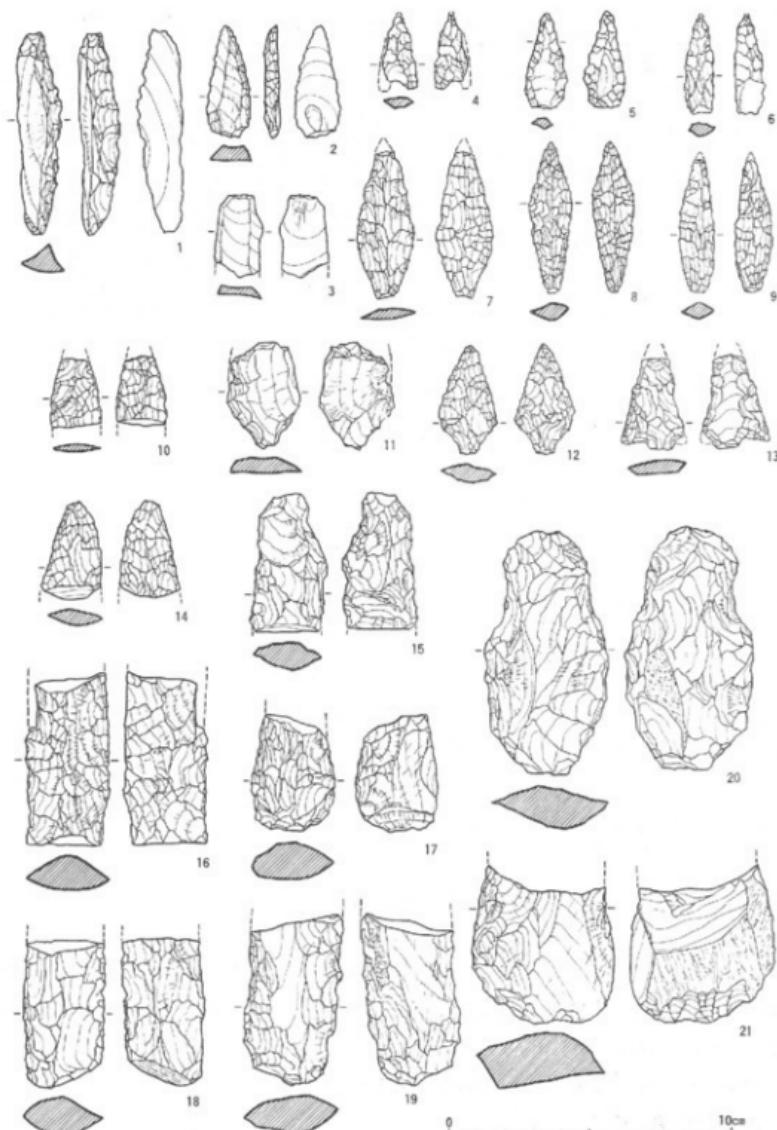
6. 石 器

石器には後期旧石器時代に属するナイフ形石器と縦長剣片のほかは、大半が弥生時代中期に属するものである。製品以外に結晶片岩片や砂岩礫などもみられるが、石材としてはサヌカイトが最も多く、石核、剣片を含めて739点出土している。

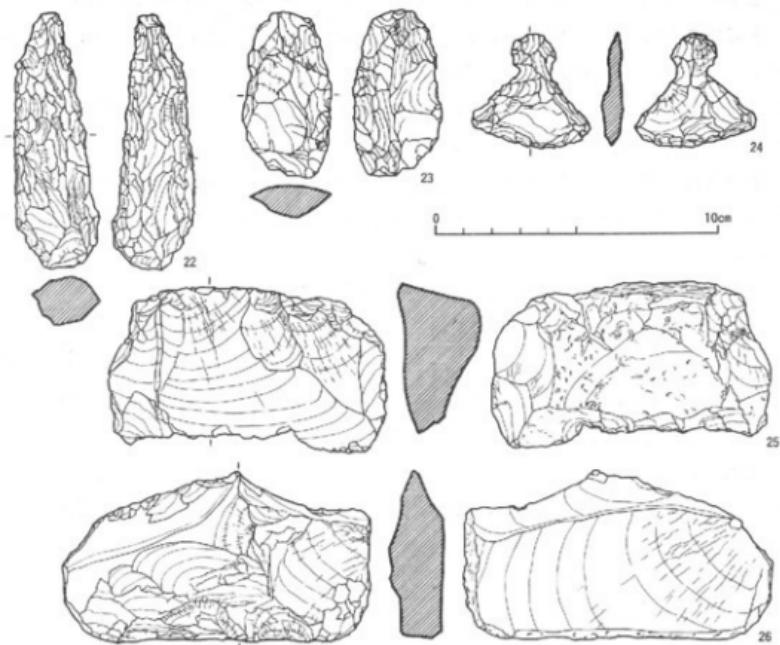
観察にあたって、実測図の左側をA面、右側をB面とする。

ナイフ形石器（插図20 1、2）

ナイフ形石器は2点出土している。



挿図20 ナイフ形石器・縦長剝片・石鎌・石槍



挿図21 石槍・石鎌未製品・石核

(1)は横長剝片を素材とし、打面側に腹面側から丁寧な加工を施して背部を形成している。上端と下端も同様に加工が施されている。刃部は第1次剥離によって得られた鋭い縁辺をそのまま残している。断面は三角形状を呈する。

(2)は縦長剝片を素材とし、片側縁に丁寧な加工を施しているが、素材の打面は残されたままである。全体の形状は柳葉形を呈する。断面は台形である。

縦長剝片 (挿図20 3)

(2)のナイフ形石器の素材剝片と思われる。断面は台形である。

石鎌 (挿図20 4~13)

石鎌はすべて打製石鎌で10点出土している。すべてサヌカイトを石材として用いている。基部の形状からみると凹基無茎式(2)、平基無茎式(5)(6)、尖基無茎式(7)~(9)、凸基有茎式(11)~(13)の4型式がみられる。これらの他に、未製品と思われるものもある。

凹基無茎式(2) 1点だけ出土した。基辺は円く凹む。逆刺は四角形状を呈する。

平基無茎式(5、6) 2点出土している。(5)は両面ともに大剣離面を残す。(6)は基辺が欠失しているので尖基無茎式になる可能性もある。

尖基無茎式(7～9) 3点出土している。側辺が角ぼる(7)(8)と丸みをもつ(9)がある。いずれも大型の石鎚で、とりわけ(7)は幅広のものもある。

凸基有茎式(11～13) すべて幅広で、比較的厚身のものである。逆刺は円くなだらかなもの(11)(12)と角をなす(13)がある。(11)の調整は極めて粗い。(13)のB面中央には大剣離面が残る。

未製品(23) 平面形は橢円形を呈す。両側辺から調整剝離を施している。

石槍 (挿図20、21 14～19、21、22)

すべてサスカイトを石材として用いている。石槍の大半は幅3cm程度の両側辺の平行するものであるが、幅5cmをはかる大型の石槍の基部片もみられる。(18)は基部に、(21)はB面の基辺に自然面が残る。(22)は石槍としては小型のものである。

石匙 (挿図21、24)

サスカイト製である。扇形を呈する石匙で、背頭部につまみがある。刃部は両刃の外彎刃である。

石核 (挿図21 25、26)

(25)はA面にのみ複数の剝離痕をもつもので、B面は自然面である。

石庵丁 (挿図22 27、28)

石庵丁は2点出土している。ともに緑色片岩を石材として用いている。

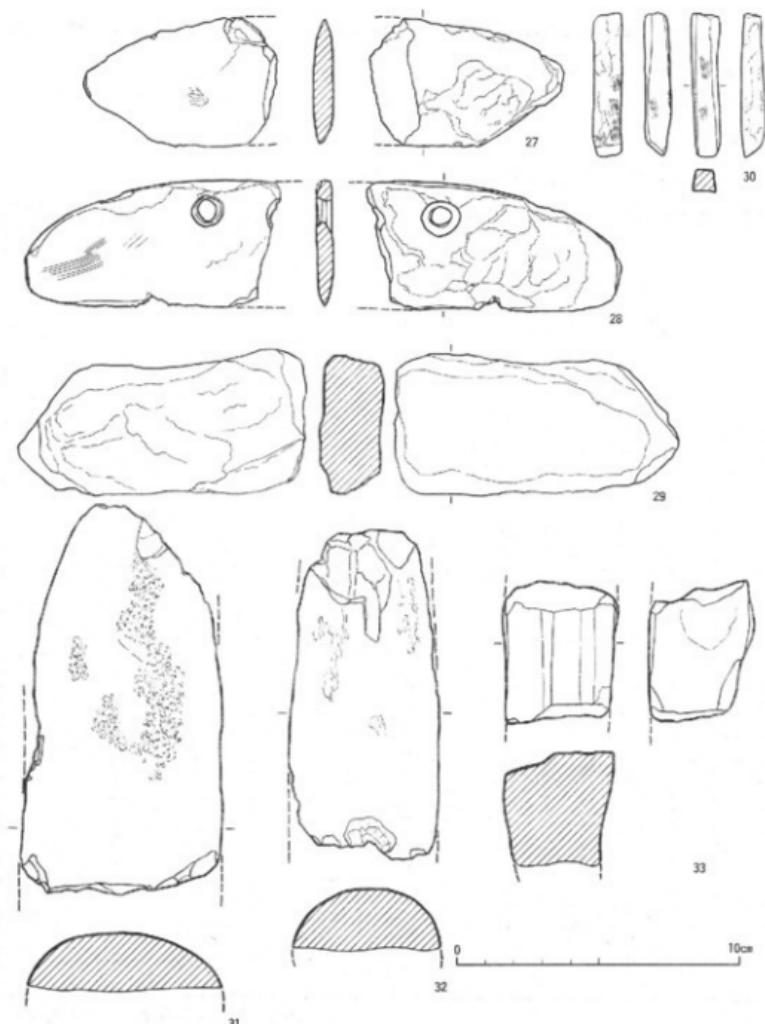
(27)は杏仁形態の石庵丁である。全体に磨滅が著しく、残存状態はよくない。刃部稜は不明瞭である。両刃気味の片刃である。背部は尖る。

(28)は直線刃半月形態の石庵丁である。B面は剥離が著しいため片理面が目立っている。また、B面右半分には光沢もみられる。刃部稜は不明瞭である。両刃と思われる。刃部には刃縁に直交する線条痕がわずかであるが認められる。

(29)は点紋をもつ緑色片岩片である。厚さは2.25cmと部厚いものであるが、半裁されているので石庵丁の原材と考えられる。この他にも緑色片岩片が1点出土している。

柱状片刃石斧 (挿図22 30)

1点だけ出土している。小型の柱状片刃石斧で、片理面に直交する方向に刃縁を作り出している。抉りはみられない。刃部は片刃で、刃縁の形状は右上りに偏りがみられる。この柱状片刃石斧は再加工品で、破損面が刃面側、右側辺(刃面側からみて)、基端にみられる。この中で刃面側だけに研磨を施しているが、刃部の研磨が丁寧に施されているのに比べて、基部の研磨



挿図22 石庵丁・柱状片刃石斧・大型蛤刃石斧・砾石

は粗く、全面におよんでいない。断面は台形を呈す。石材は結晶片岩である。

大型蛤刃石斧（挿図22 31、32）

2点出土している。ともに溶結凝灰岩を石材として用いている。

(31)は上下端共横方向に破損している。打撃痕が中央にみられる。(32)に比べて大型の大型蛤刃石斧になると考えられる。

(32)は大型蛤刃石斧としては細身のものである。上下端共横方向に破損している。

砥石（挿図22-33）

極細粒の砂岩製の砥石で、現存面すべてに使用面が認められる。

石器番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土地点
1	ナイフ形石器	7.2	1.6	1.0	9.7	堆積層
2	〃	4.0	1.6	0.6	3.8	地山直上
3	縦長剥片	(2.95)	1.6	0.3	(2.7)	溝 3
4	石鎌	2.6	(1.25)	0.4	(0.9)	溝 8
5	〃	3.5	1.5	0.5	2.7	3区第7層
6	〃	(3.5)	1.1	0.5	(1.6)	溝 8
7	〃	(5.2)	2.0	0.45	(4.8)	落ち込み 2
8	〃	5.3	1.6	0.6	4.5	L.N. 256
9	〃	(4.7)	1.25	0.65	(3.4)	第5層
10	〃	(2.5)	1.8	0.3	(1.7)	表 探
11	〃	(3.9)	2.6	0.6	(5.8)	3A区第6層
12	〃	4.0	2.0	0.7	4.5	溝 8
13	〃	(3.4)	2.2	0.5	(4.1)	表 探
14	石 樟	(3.5)	2.2	0.7	(4.4)	第5層
15	〃	(4.9)	2.6	1.0	(20.7)	3A区第6層
16	〃	(6.2)	3.0	1.3	(32.0)	溝 10
17	〃	(3.65)	2.9	1.3	(20.2)	落ち込み 1
18	〃	(5.8)	2.9	1.4	(22.9)	溝 2
19	〃	(6.1)	3.5	1.4	(40.2)	表 探
20		8.7	4.4	1.5	90.2	落ち込み 4
21	石 樟	(5.6)	5.1	2.0	(61.0)	4B区第6層
22	〃	9.1	3.0	1.8	46.6	4A区第6層
23	石鎌未製品	5.9	3.1	1.2	23.8	溝 8
24	石 鋏	4.0	4.2	0.8	10.8	溝 3
25	石 核	5.9	9.7	2.9	191.5	溝 8
26	〃	6.1	10.8	1.95	151.0	溝 8
27	石 底 丁	(6.8)	(4.55)	0.75	(32.0)	土器群 2
28	〃	(10.0)	4.5	0.6	(40.9)	第5層
30	柱状片刃石斧	5.1	1.0	0.8	11.0	4A区第6層
31	大型蛤刃石斧	(13.9)	(6.95)	(2.1)	288.0	土器群 2
32	〃	(11.7)	(5.3)	(2.2)	235.5	落ち込み 3
33	砥 石	(5.2)	4.05	(4.0)	108.0	落ち込み 3

表6 石器の法量表 (())は残存値)

7. 小 結

ここでは、主要な出土遺物について、出土状況およびその年代について補足する。

今回の調査で初めて、中野遺跡から後期旧石器時代に属するナイフ形石器が検出された。

弥生土器は大半が溝8以東から集中して出土したが、その多くは攪乱を受けた遺構（土器群1・2、落ち込み2）から検出された。弥生土器はすべて畿内第Ⅲ様式に属するもので、全体的に古い様相をもつものが多い。例えば、土器群2からは球形の体部に長い頸部とほとんど拡張しない口縁端部をもつという畿内第Ⅱ様式に近い形態の壺A(2)が出土しているのをはじめとして、壺Eの口縁下端が角をなしていること、高杯Bの口縁部の垂下の程度が短いこと、高杯脚柱部に中実・半中実のものが多いことなどがあげられる。土器群1については、壺A(2)のように最古式に含まれるものがないことと、また、壺C(23)の口縁端部に凹線文がみられるという新しい様相をもつものが1点出土していることを除けば、その他の状況はほとんど変わらない。このことは他の遺構出土のものについても言える。新しい様相をもつものはその量も少なく、凹線文は壺Cや鉢Bの口縁部、台付鉢の頸部にみられる程度で、発達した凹線文をもつものはまったく認められなかった。

須恵器と土師器は調査区全域から出土したが、その大半が古墳時代後期の遺構から出土している。その他、堆積層からは古墳時代後期～奈良時代のものが出土している。土師器は細片が多くいため詳細は不明である。須恵器の中で最も古いものは溝12から出土している。すなわち、長脚1段透しの高杯が残る段階のもので、杯蓋は天井部と口縁部の境に凹線がみられる。次に溝10、溝8出土のものとつづく。これらの段階のものは今回の調査の中心となる時期のもので、他の遺構出土の須恵器もほぼこの時期のものと考えられる。溝10と溝8を比較してみると、蓋杯では古い方の器形はそれほど小型化していないとはいえ、天井部と口縁部の境が不明瞭になっている段階のものである。新しい方は溝8出土の杯の方に矮小化したもの(53)が含まれてくる^(注1)というように溝8の方が若干、新しい要素が認められる。また、提瓶でも溝10出土のものは環状もしくは鉤状の耳が付されているのに対しても、溝8のものはボタン状のものが付されている。以上のように、各遺構ごとに新旧の要素がみられるものの、溝12出土の古いものを6世紀中頃に、溝10、溝8出土のものを6世紀後半の時期に比定することが出来ると思われる。

今回の調査で、内面に車輪文叩き目の施されたものが4点出土した。これらの文様はそれぞれ違うが、そのうちの1点(91)が陶色のTG68号窯出土のもの^(注2)（第170図5）に類似することだけを記述しておく。

(注1) 溝8出土の杯(56)～(58)は出土状況から考えて後世の流入と思われる。

(注2) 中村浩『陶邑Ⅱ』大阪府教育委員会第29輯 大阪府教育委員会(1977年)P.241

V ま と め

ここ数年来、市教育委員会では中野遺跡に着目し、數次にわたる本格的な発掘調査を実施してきた。こうした過去の調査によって、中野遺跡が弥生時代から中世に至る複合遺跡であることがより明らかになってきた。また、1980年7月に実施された大阪府教育委員会の調査では、^(注1) 同遺跡で初めて縄文時代後期に属する土器が検出され、同時期の遺構の存在を推測させる新しい資料の提供を受けた。今回の調査地は中野遺跡の南部にあたり、約1,000平方メートルの面積を対象に調査を実施した。その結果、溝・土壙等をはじめ掘立柱建物を検出した。調査の成果をまとめると以下となる。

1 調査区東半部地山直上で、後期旧石器時代に属するナイフ形石器を検出した。市内における旧石器の出土は、喜志遺跡、新家遺跡に次いで今回が3例目である。今後の中野遺跡内に^(注2) おける調査でも出土する可能性を考えられ、羽曳野丘陵山麓から石川にかけての河岸段丘上に^(注3) 旧石器時代の遺跡の存在を想定させるものである。

2 石核、剥片を含めて739点のサヌカイトが出土している。こうした大量の出土は、調査地北側の^(注4) 調査でも認められ、中野遺跡が喜志遺跡と同様に石器製作に関連した性格をもった遺跡であることが推測できる。

3 弥生土器は調査区北東部の4A・B区に集中して出土しており、溝8以西では若干の遺物散布が認められるにすぎない。出土状況からみて、弥生の集落は少なくとも調査地以東に広がる可能性を考えられ、今回の調査で集落の想定範囲の西端の一角を把握したといってよいだろう。

4 溝8・溝10等で出土した円筒埴輪は、川西氏編年のV期に該当するものである。同種の埴輪は、調査地北方の大坂府教育委員会の調査においても出土しており、調査地周辺の平地に古墳が存在したことを想定させるもので、今後の周辺の古墳のあり方を知る資料となり得るものである。^(注5)

5 溝8以西において検出した掘立柱建物は計8棟ある。それぞれの建物の方向から分類を試みると、(1) 方位が北2~4度東のもの…建物1・2・3 (2) 方位が北12度東のもの…建物4・5 (3) 方位が(1)・(2)以外のもの…建物6・7・8の大きく3群が考えられる。これらの建物のうち規模が明らかなものは、建物1・2・7・8の4棟である。建物1は2間×4間の建物で、掘方もしっかりとおり、主屋的な性格をもつものと考えられる。建物2は2間×2間の縦柱建物で、倉庫である。建物1~7においては重複関係が認められ、方位的な差が時期的な差と考えれば、同時期に何回かの建替えが行われたと思われるが、この点については建

物群の広がりとあわせて今後検討すべき課題である。

6 調査区中央を南北に流れる溝8は、幅約5m、深さ約70~80cmを測るもので、人工的に掘られた溝と考えられる。河床からは6世紀後半の遺物が認められ、その時期には豊満な水量を保っていたことが推測できる。溝8は以西の掘立柱建物群と関連があったものと思われ、その引水方法、下流の方向等を更に検討する必要がある。

7 検出した造構の築造年代は6世紀中頃から6世紀後半の時期に位置づけることができる（注7）と思われる。本調査地から西方約100mの前年度調査では6世紀末から7世紀中頃に至る造構を検出しており、時期が新しくなるにつれて集落は新堂廃寺周辺の西方に移動していったと推測され、溝8の性格とも考えあわせて今後の検討課題としたい。

(注1) 尾上実「中野遺跡発掘調査概要」（大阪府文化財調査速報「節・香・仙」第32号、1981年）

(注2) 尾上実「喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会（1980年）

(注3) 今村道雄「新家遺跡発掘調査概要Ⅱ」大阪府教育委員会（1981年）

(注4) 中村浩編著「中野遺跡発掘調査報告書」富田林市教育委員会（1979年）

(注5) 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第2号、1979年）

(注6) 大阪府教育委員会が1981年度に実施した国道170号線舗道工事に先立つ調査で、6世紀前半の廻とともに古墳の周濠と推定される造構から出土している。玉井功氏のご教示による。

(注7) 富田林市教育委員会「中野遺跡発掘調査概要Ⅱ」（1980年）



掘立柱建物検出状況（東より）



挿図23 調査地点位置図

図 版



中野遺跡付近の航空写真（富田林市史編集室提供）北東より

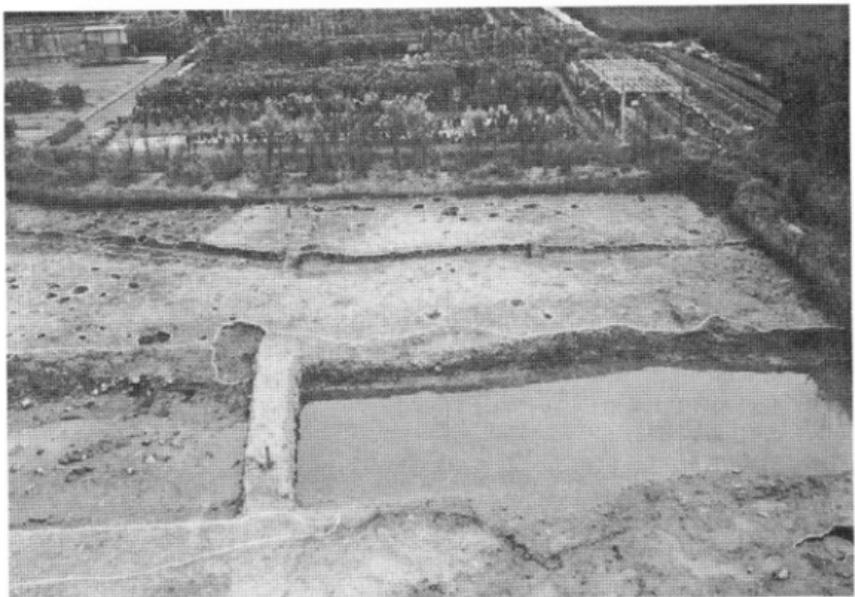


調査区遠景 東より

図版 2



調査区北東部全景 南西より



調査区南東部全景 西より

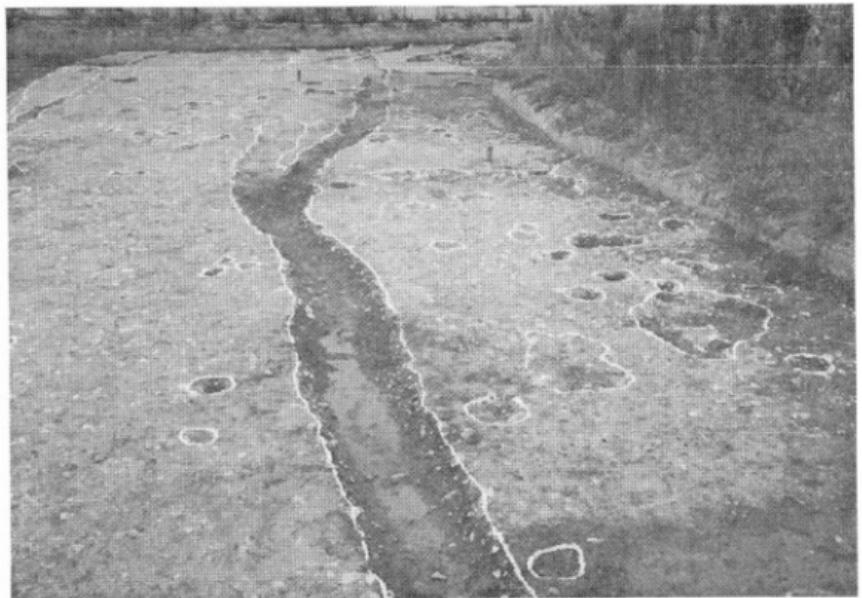


落ち込み 2 南西より



落ち込み 3 南西より

図版 4



溝2・3 南より



土器群1下地山面 北西より

図版 5



満8・10 南より



満8 断面 北より

図版 6



土器群1 北より



土器群1 壺出土状況 西より

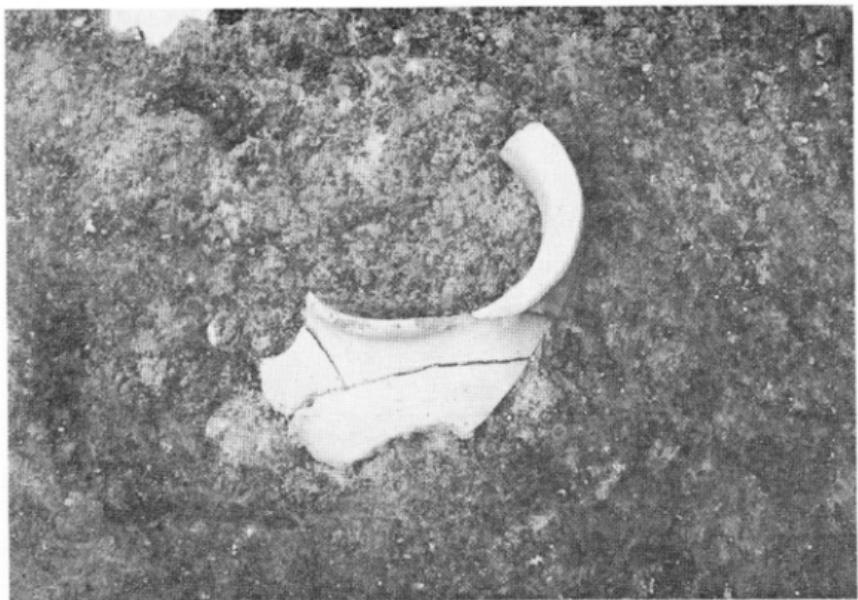


土器群2 北西より



土器群2 (部分) 北より

図版 8



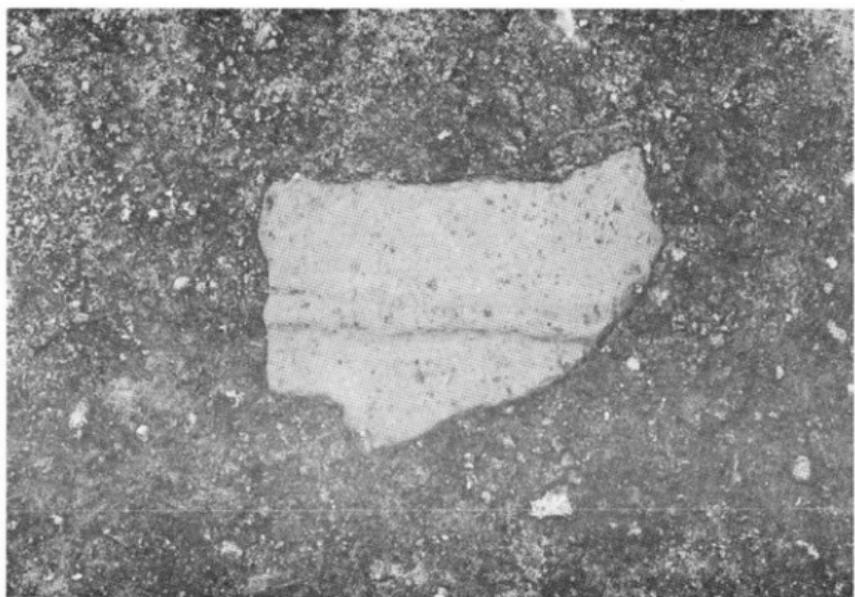
4 A区第4層遺物出土状況 南より



落ち込み 3 砧石・大型蛤刃石斧出土状況 東より



4 A区第4層埴輪出土状況 北より

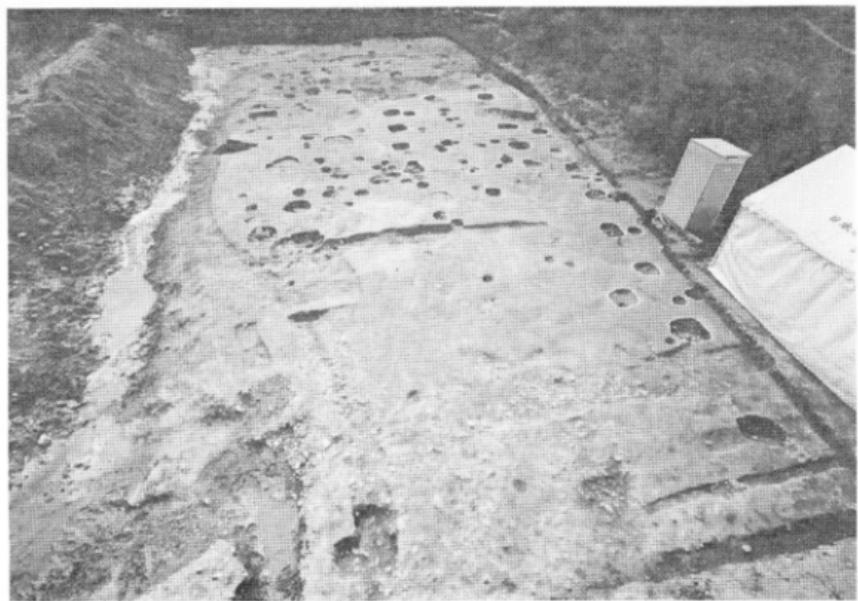


2 C区溝10埴輪出土状況 南東より

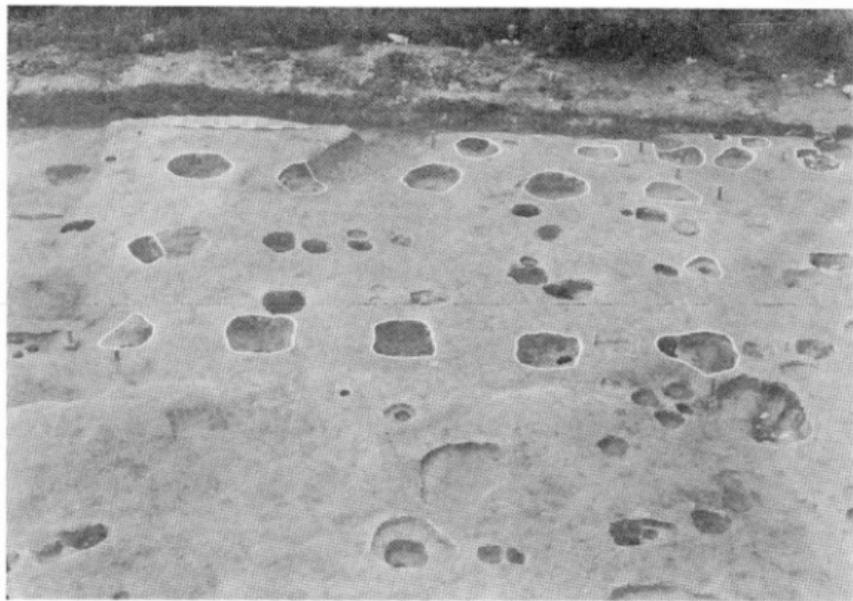
図版10



溝8・9北壁断面 南より



調査区西半部全景 北より



掘立柱建物1・2・3・7 東より

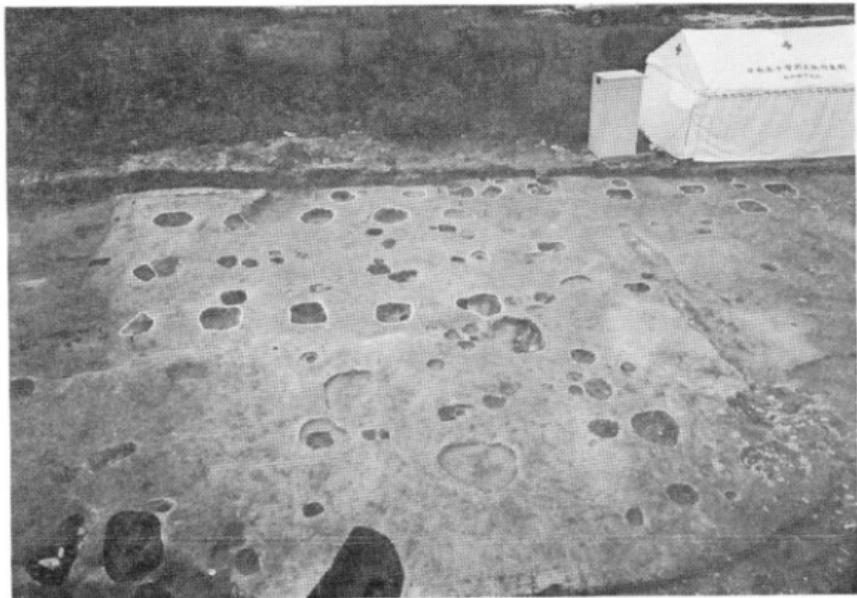


掘立柱建物1・2 北より

図版12



掘立柱建物3・4・5・6 東より



1B区全景 東より



満12須恵器杯出土状況 東より

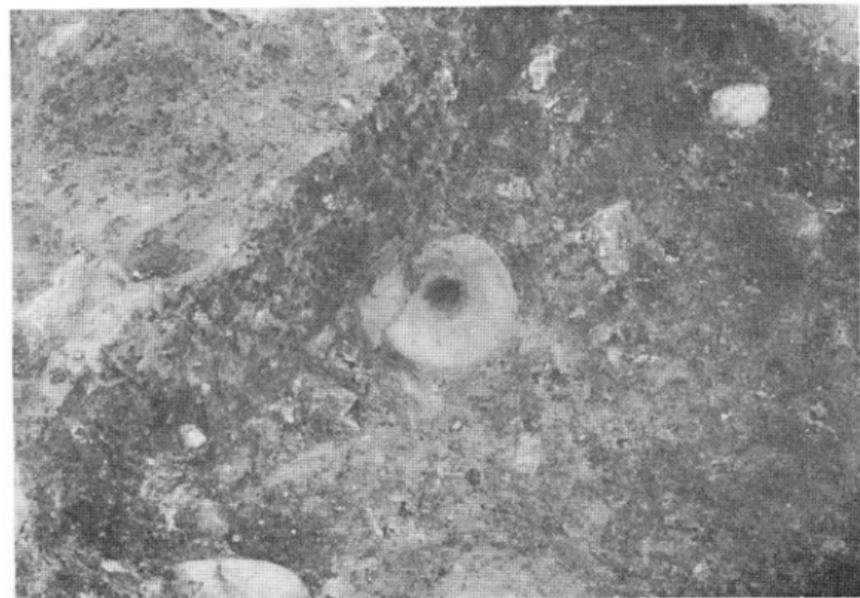


満12遺物出土状況 北東より

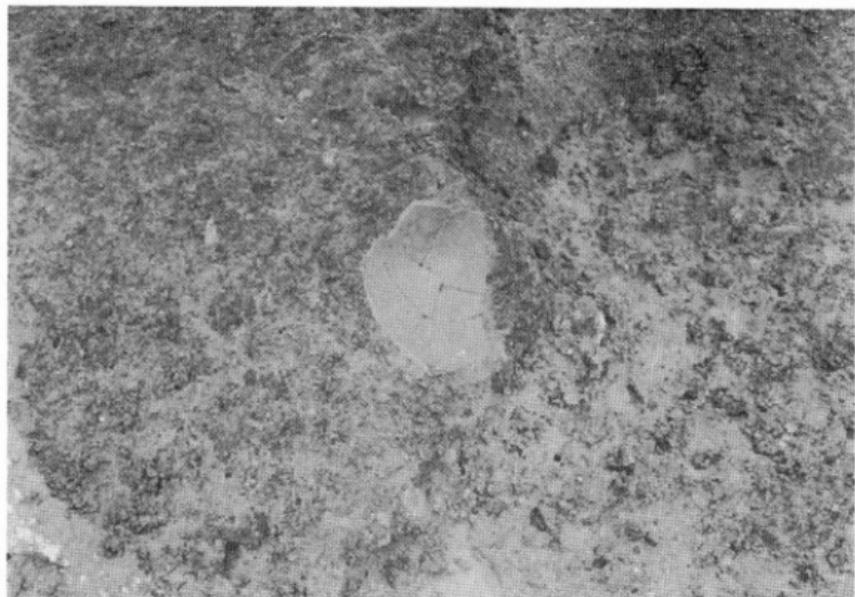
図版14



溝12遺物出土状況 南東より



溝12土師器高杯出土状況 南西より

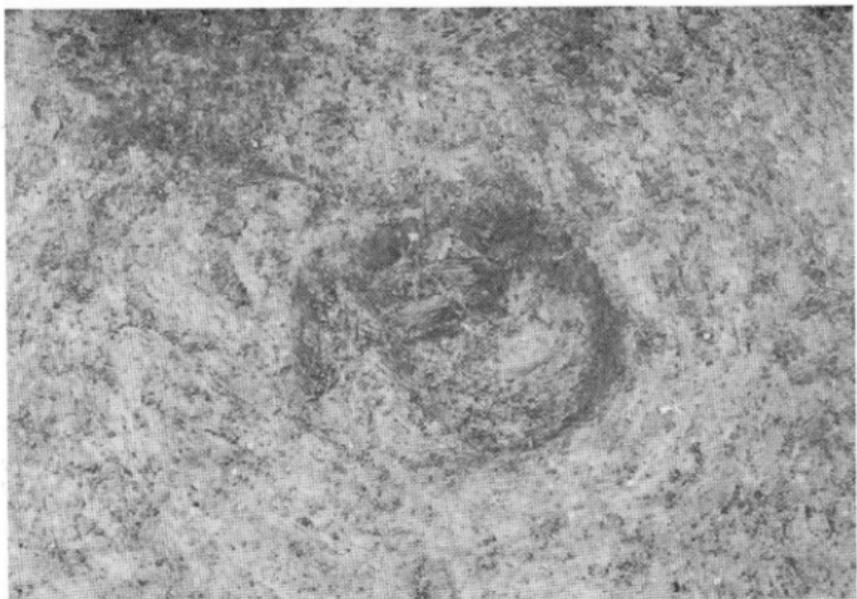


土壤2 土師器出土状況 西より



掘立柱建物7 L.N.379須恵器杯出土状況 北西より

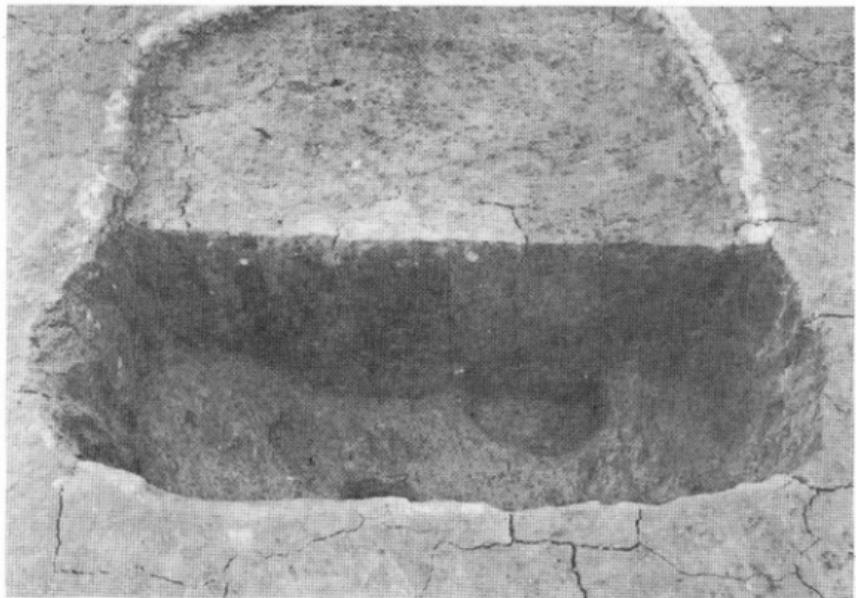
「図版16」



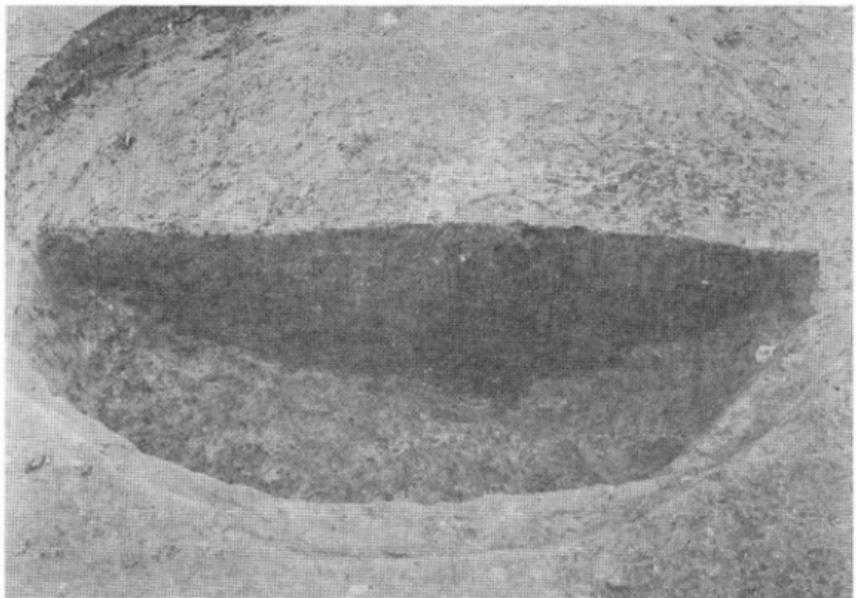
掘立柱建物1 L.N.397木片出土状況 南より



掘立柱建物6 L.N.279詰め石 北東より



掘立柱建物1 L.N.284断面 東より



掘立柱建物1 L.N.400断面 西より

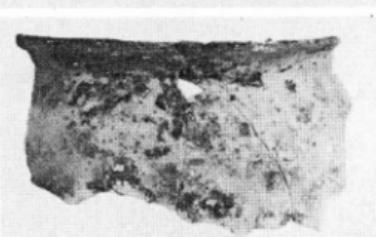
図版18



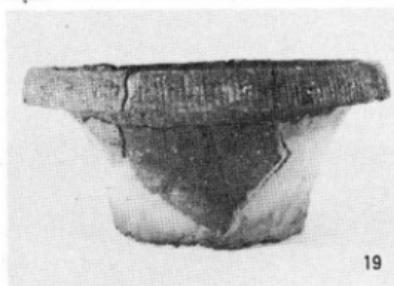
2



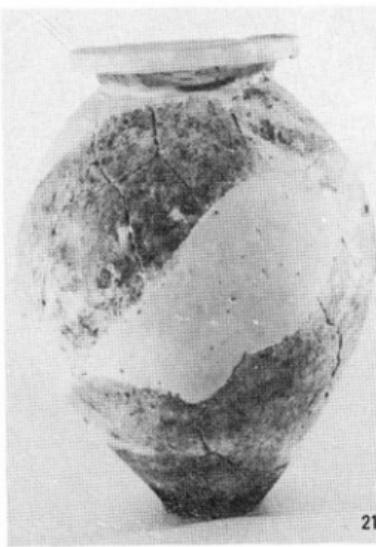
13



14



19



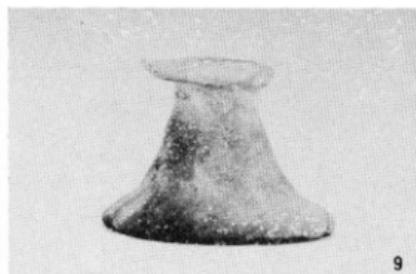
21

弥生土器（壺・甌）

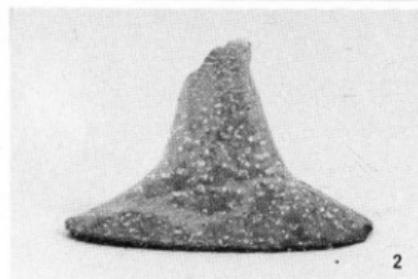
20



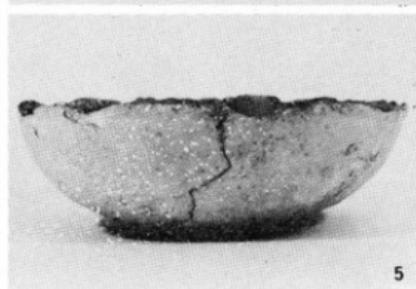
1



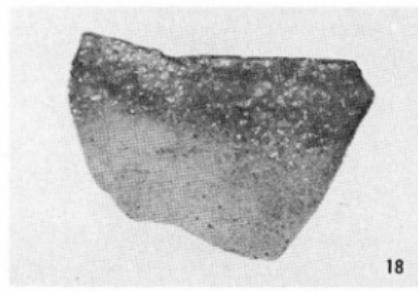
9



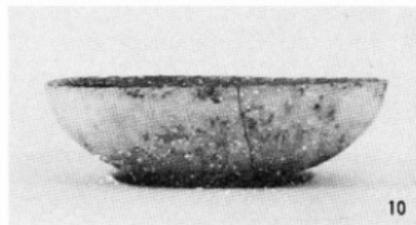
2



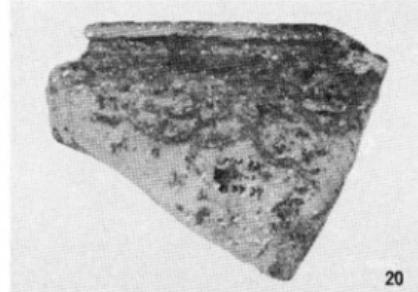
5



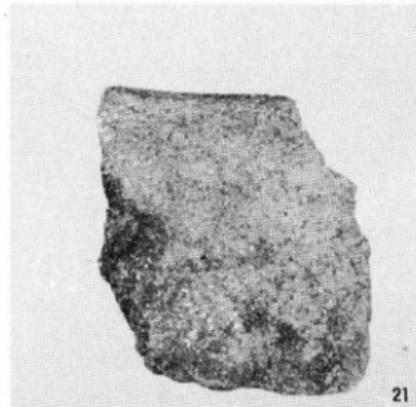
18



10



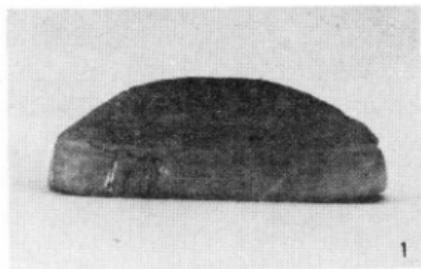
20



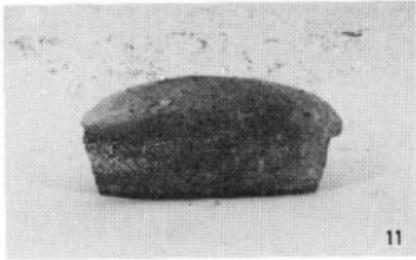
21

土器 (杯・高杯・甌・鍋)

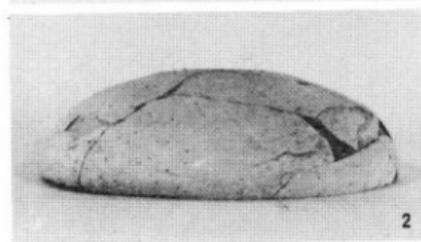
図版20



1



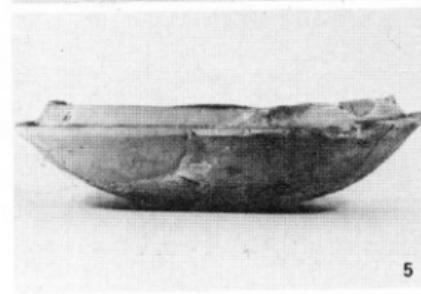
11



2



14



5



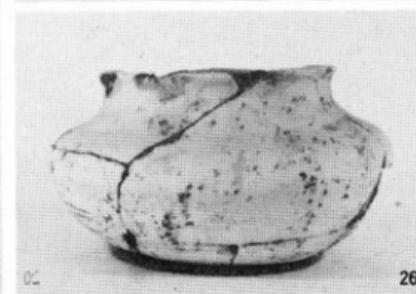
24



39

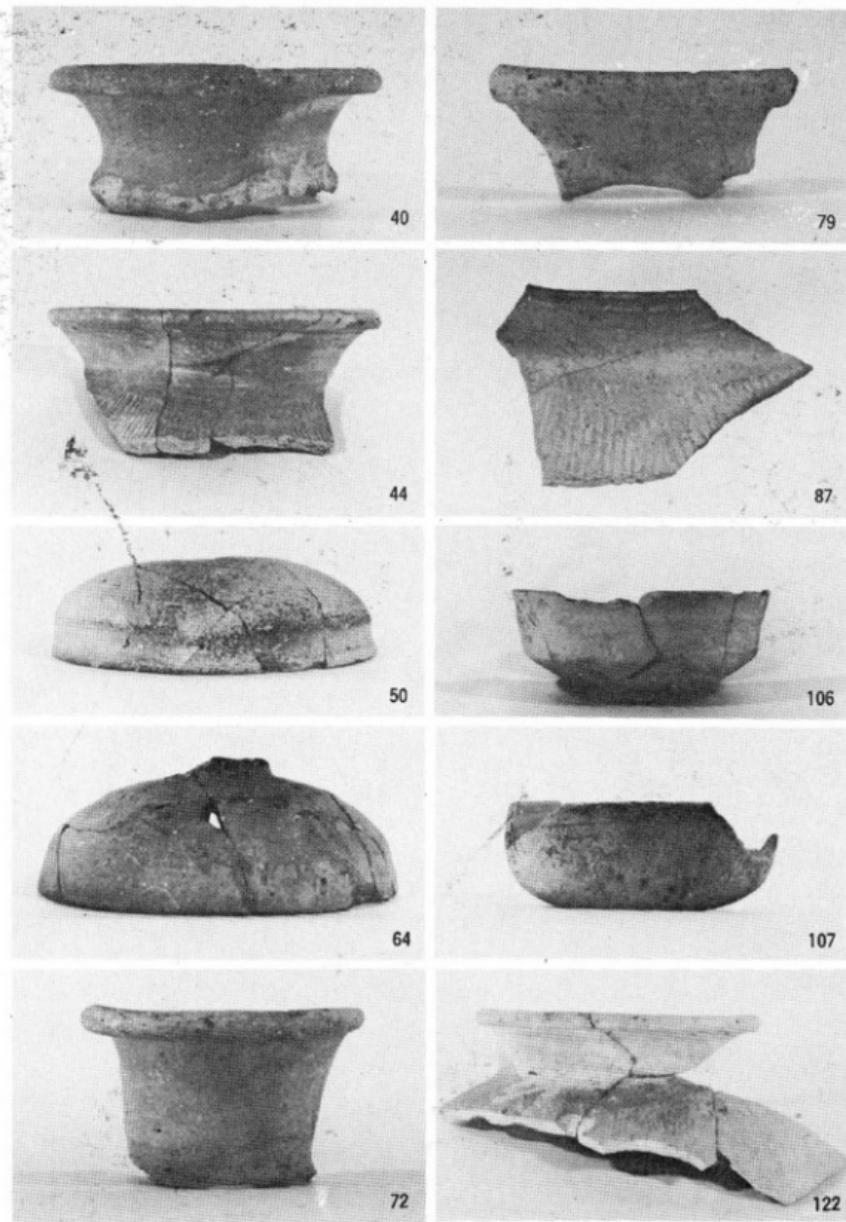


32



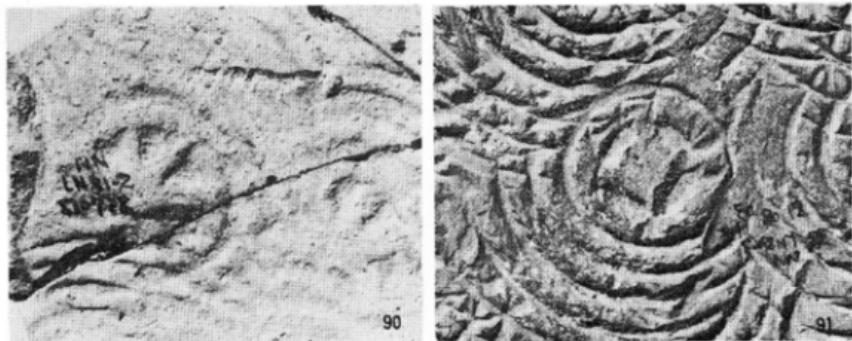
26

須恵器（蓋杯・高杯・横瓶・短頸壺）



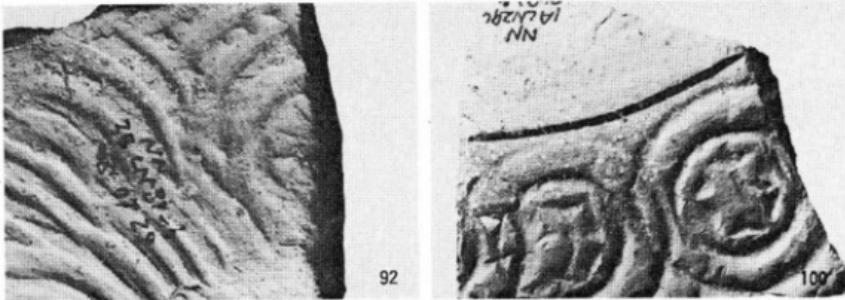
須惠器（甕・蓋杯・高杯蓋）

図版22



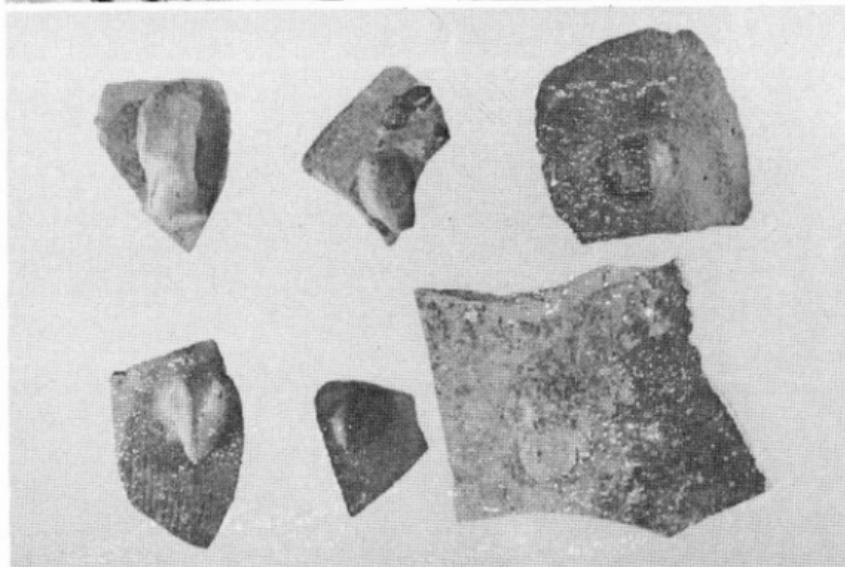
90 91

90 91

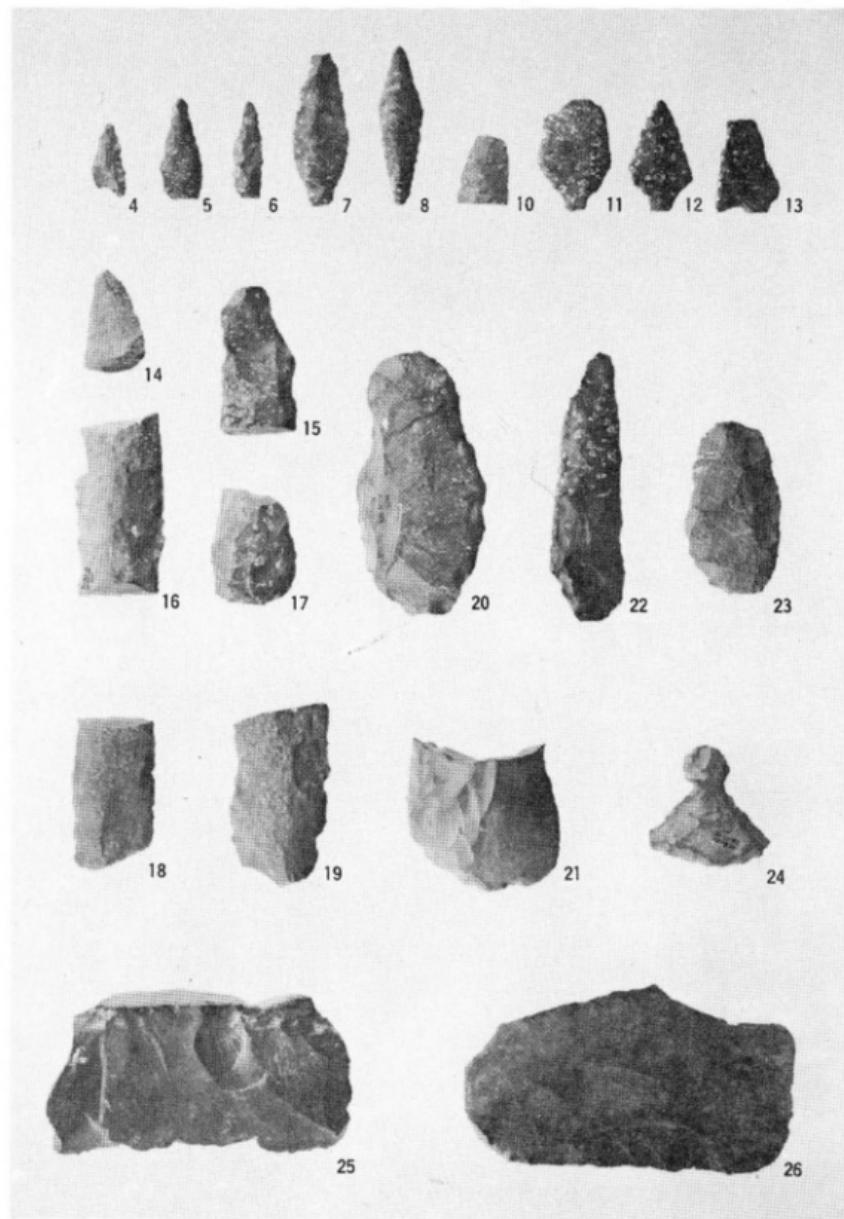


92

100

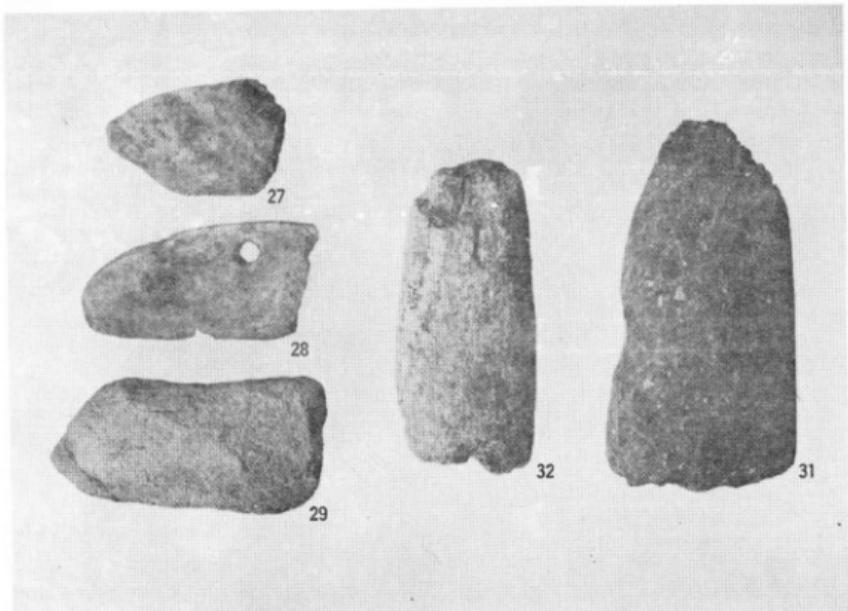


須恵器（車輪文・提瓶・平瓶）

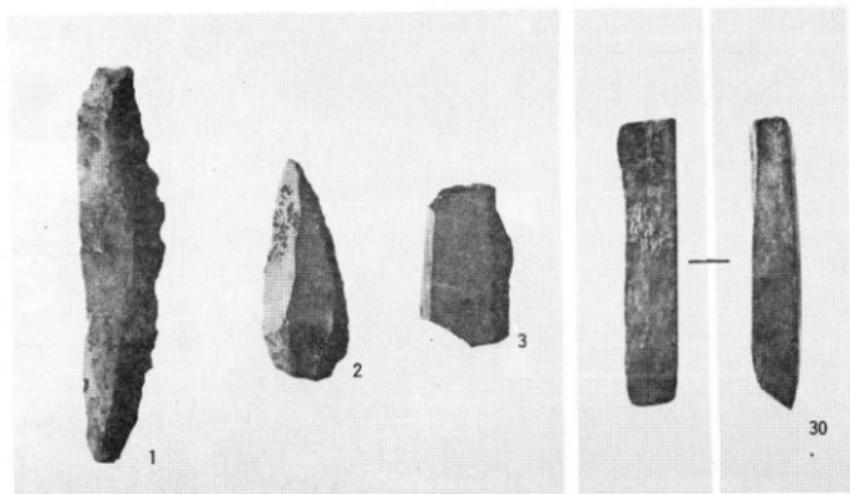


打製石器（石鏃・石槍・石匙・石核）

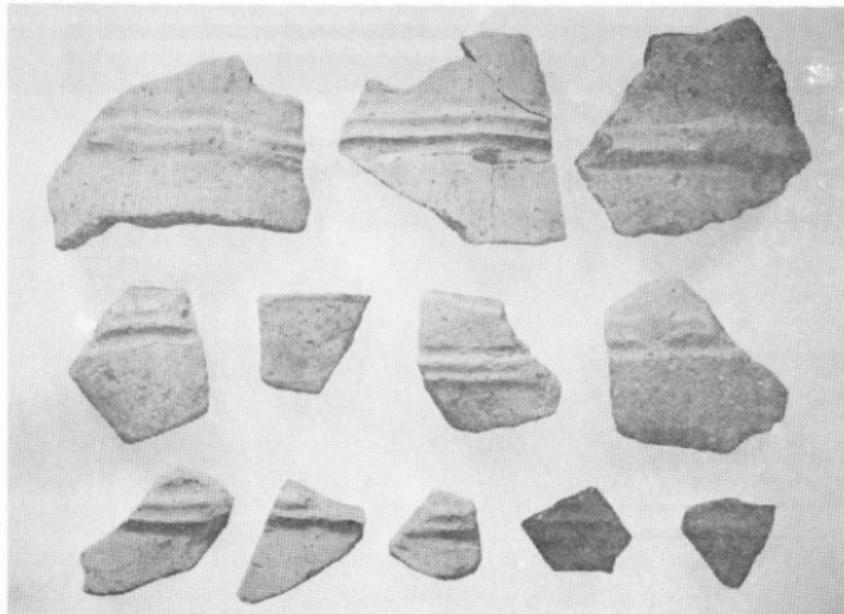
図版24



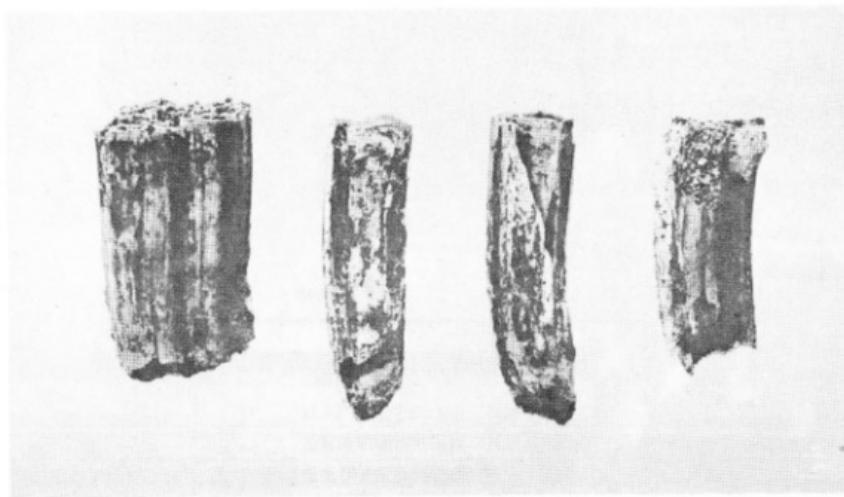
磨製石器（石庖丁・大型蛤刃石斧）



旧石器（ナイフ型石器・縦長制片）・柱状片刀石斧



円筒埴輪



馬齒

富田林市埋蔵文化財調査報告7

発行年月日 1982年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 石橋印刷所

